
自然使い ナチュラル・マスター

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自然使い ナチュラル・マスター

【Nコード】

N2347P

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

自然の全てを操り、戦うもの。

それが、自然使い ナチュラル・マスター。

その、マスターは子供！？

美人元盗賊・マリーと

幼くして有名な自然使い ナチュラル・マスター のアルの旅は続く！

お蔭様で完結しました！

【1】（前書き）

【諸注意】

ネタバレ有。

本編は三話からです。

【1】

アル・ペイズリー

ナチュラル・マスター

本作の主人公であり、自然使いという異能力者。
雲のようにふわりとした髪に
雷のように黄色い瞳。

10歳。実年齢：25歳？

使える自然は

- ・火（炎）
- ・水（氷）
- ・風（空気）
- ・植物
- ・石（岩）
- ・空（天気）
- ・土（砂）

イル

アルの心の中に潜んだもう一つの人格。
すべての能力を使えるが、マイナス方向の技を好む。
全てがアルの逆で、『真つ黒の髪に、紫の瞳』。
心の中の“黒い箱”に封じられていた。

マリー・ウエポムンド

変装が得意。

カトラリー・マスター

刃物使い

元女盗賊。

ナイスバディ。23歳。（本人的にはふせたいらしい）
結構ケチ。根に持つタイプ。

グレイグ・レッゴ

世界で一、二を争う程の銃撃手。ガン・マスター銃使い。
31歳。

アルが自ら、“七年前”牢獄送りにしたが、何故か脱走中の身。

デビット・アリエルド
ダーク・マスター
闇使い。

ルナエラ・リキュラ【通称・ルナ】
デビットのしもべ的な人。

語尾がウザイ程上がる。

ツインテールの金髪。

特に『使い』ではないが、透視能力と、どくしん読心能力を持つ。

コリッタ・モウ

ボクっ娘。

“あたし”。パワーコントロールうさぎ&念動力を使う。

ジュレン・アーンフォーム（ウィンド・クリギエル）

ナルシストで女ったらし。

タイムマスター
実はデビット側で、時間使い。

アニリエル&リリエル

二人とも異能力者。

双子。

アニリエル：

弟。

精神操作できる。

リリエル：

姉。

異空間を扱う能力者。 パラレルワールド・マスター 異空間使い。

カイン ゴッド・スパーク

改人というある特別な人間。

美子と、零にタメ口がきける。

ゴーズ・セルイズ

40歳前後の男。

デステニー・マスター
運命使い。

バルドⅡ エクス

真っ黒い服や物を好み使う。

デビットと関わりのある人物らしいが……

チャライ。

正義と聖者が嫌い。

バッド・シナリオ
嘘の台本

戸梶 美子とがじ みこ

黒いものを好む。年齢不詳。

一人称：妾あたし。

口調が曖昧。

最強らしい？

創世者マスターという“く使い”の創世者。

魚谷 あいりうおや

美子に従うメイドさん。

実年齢と外見のギャップが凄い

吉廣 エンよしひろ

デリーター試験主催者。

歳の割に、見た目は若い。本人曰く、39歳。

美子と知り合いらしいが……？

アラド・シフィノ

一時記憶喪失だった青年。

青い髪と赤い目を持つ。

精霊スピリット・マスター使い。

青の妖精：ループル

零れい

天才依頼請負人。

透き通るような綺麗な黄緑色のロングストレートと

炎と間違えるかのような赤い瞳の持ち主。

一人称は『僕ちゃん』他人のことはどんなに目上でも『くちゃん』

と呼ぶ。

〈1〉（前書き）

名前の省略はご了承ください。

キャラクターについては、「人物紹介」を参照してください。

【諸注意】

ネタバレ有。

（最小限にするため、技の名前だけ明記してあります）
本編は三話からです。

〈1〉

アル（イル）

ナチュラル・マスター
自然使い

アル：

イル：

ブラック・エンド

「世界の終わり」

「無」

ゼロ

マリー

カトラリー・マスター
刃物使い

グレイグ

ガン・マスター
銃使い

デビット

ルナエラ

読心能力、透視能力

コリッタ

うさぎ、
パワーコントロール
念動力

うさぎに関して：

ハリネズミフォーム

「針鼠型」

ビッグモード

「おおきくなれ」

リターンリバース

「元に戻れ」

パワーコントロール
念動力に関して：

ジュレン（ウィンド）

タイム・マスター
時間使い

アニリエル&リリエル
アニリエル： 精神操作

リリエル：
ワープルーム
異次元の隙間
パラレルワールド・マスター
異空間使い

ゴッド

ゴーズ
デス・デステニー
運命使い
「運命崩し」

バルド
フリーアクション
バッド・シナリオ
嘘の台本
「お遊びの時間」

美子
マスター
創世者

アラド

「アヴィス・メズル・リードウ」

零

本物

白いふんわりとした、雲のような髪。

雷のように、黄色く輝く瞳。

ナチュラル・マスター
それが、奴の特徴だった。

がっしやああん。

大男が、店の中で暴れている。

「おおい、さつさと料理持ってきたやがれ！俺様は、ナチュラル・マスター自然使い様だぞ
お」

完全に酔っている。

「・・・・・・・・」

黙々と、品を出している彼女は、元女盗賊のマリー・ウエポムンド。
茶色の短髪に、我が儘なしのボディー。

彼女はある程度出し終わったところで部屋のすみへ行き、携帯を取り出した。

誰かに連絡をつけているようだ。

ブルルルル、と一回鳴ったところで、大男の部下に気付かれてしまった。

「こいつ、どっかに電話しようとしてやがったぜ」

「いたっ、離しなさいよ！クズ！」

「ほお、威勢のいい女だな。気に入った！」

「はあ！？」

マリーは縄で縛られ、角に置かれた。

と、すると。

ゴン、と入り口で何かがぶつかった。

「いたあい。僕入り方、知らないよお」

「！」

マリーは声を聞くとすぐ、頭をあげた。

来たわね。待ってたの

と言わんばかりの表情。

ナチュラル・マスター

「あ、おじさん、自然使いつて本当？」

「ああ？何処のガキだあ？まあいいや。ああ、そうだが。」

「うわあ、会って見たかったんだあねえ、技つかってえ？」
ねだる。

「おいおい、ガキい。このお方はなあ」

「いいぜえ」

お方、軽っ

「うわあい！やっ」

ゴッ、メシャアア、といやあな音が響く。

顔面に、鈍器が当たり、“子供が飛んだのだ”。
バラバラ、と店の一部が崩れた。

本物2

崩れた。

上に。確実に死んでいる。

「はっはー。部外者が探り入れるからいけねえんだよ」
大男が笑う。

「ちょ、なにしてるのよ！相手は子供じゃない！」

「子供？かんけえねえよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガラ、、、、

「！」

「ふう、いつたいなあ。何するの？」
生きて、いた。

「なっ、バカな！生きているはずがな」

部下が最後まで言うまえに、飛ばされた。
何かによつて。

「な、な、何が起きてるんだ！？」

ヒュバツ。

いつの間にかマリーの縄が解けている。

不可能な事が起こっている。

「動かないで。動いたら、このナイフがあんたの喉かつ切るわよ」

「ひ、ひあ」

情のない声を漏らしている。

「てめえ、ただのガキじゃねえな？何もんだ？」

「えー？僕う？僕はただの、よわあい子供だよあ」

にーっこり、言う。

「言え！ー！！」

脅迫になっている。

だが、少年は怖じない。

ナチュラル・マスター

「自然使い」

ボソ、という。

「ああ？きこえ」

ドツ・・・

何かが 命中した。

「な、なんだ、これ！？」

木 である。

「いつくよお！マリーをいじめた刑だあ」

「ひい！？」

「すとおっぷ！」

ピタ、と止まる。

「アル。やりすぎないようにね？」

につこり、と笑む。

「はあい」

彼（といっても随分小さいが）アル・ペイズリーナチュラル・マスターは自然使い。

この歳、容姿、にして。

最強、最恐なのである。

「もう、やりすぎだつてえ」

「そお？マリーが大事だもん」

「・・・ったく。」

嬉しそうではない。

年下は苦手なようだ。

「お、お前、、まさか、死んだと言われたかの有名な盗賊・・・！？」

「はあい そうよん。 ひと働きさせてくれてありがとね、てんちよさん」

「うわあああああああああああつ」と。

大男の部下が、逃げる、逃げる。

「逃がさないよ。」

アルが、腕を横にひとふりした。

びゅおおおおお、と風が起き、彼らの体からブシュ、と血が出た。

「動かないでよ。」

風を使い、傷を負わせたのだ。

「僕のちから、これだけじゃないよ」

「見て見て！マリー。ほら、ねえね！」
と、無邪気に問いかける。

「んー？成長できる、輪？プレスレット胡散臭あい」

「えー、でもでもお！」

「だあめ！」

ぶー、とアルが拗ねる。

こちらへんはちゃんとこどもなのだ。

「大きくなりたいなあ」

それがアルの“あのとき”からの口癖になってしまった。
それに対し、「十分よ」と返すマリー。

マリーは、理解していないのである。

いくら、自然を使えて『最強』であっても、子供。

筋肉や神経、ましてや能力は未発達状態。

そんなときに、激しい運動などをしてみれば、

結果的、倒れたり、悪い場合、死、なのだ。

そんなある日。

世界的に有名な美術館に「グロウ・プレスレット成長の輪」が展示されるといふ噂を聞き、
マリーに報告をした、というわけだ。

あっさり断られたのだが、それは別の話。

だけど、どうしても、どうしても！

プレスレットその輪が欲しいのである。

だから。

アルはある秘策に手を出した。

「ねえ、見て見て！こんなに集まったよ！」

「何、それ？パー・・・ティ？はあ！？署名私の名前じゃない！」
しかも。

「会場はかの有名なあの美術館　　！？」

ひえええええ、と驚く。

「強制、だよお」

不敵に、笑む。

Vol.0 (後書き)

えと、今回はあとがきつきです。

いつちよまえの作家みたいで生意気、と思った方々に
深々とどげz・・・

まあ、そんなのはさて置き。

今回も、読んでいただきありがとうございます。

ネタは学校に行く間に考えているので、ほぼ、忘れがちです。

妄想と表現力がとてつもなく違いがありすぎるので
表現力が一番自分の課題でもあります。

そんな自分の作品でも読んで頂けるなんてとても光栄です。
土下座してもおさまりません。

というか、今度させてください。

ではでは、また次回。

Vol. 1

「どうやったら、こんなところで、パーティが開けるのよ!？」

「そりゃあ、勿論この力だよ」

と。

人差し指と親指で○を作った。

「ちょ、いくら使ったの!？」

「うーんとね。美術館借りるのにざつと一億かなあ？」

えへへ、と笑う。

そのお金はどこから出ているのやら。
資金

当日

「いやあ、こんな大金を積む女性だから、歳行ってるかと、思ったけど美人かつ、若いねえ」

と、そこら辺の変なおっさんに囲まれている。

これも仕事のうち、と自己暗示を掛けるマリー。

数時間前。

「ねえ、そんなのだけで警備突破なんて出来るの？」

アルの服装はいつもと同じのタートルネックに腰に何か変なものが巻いてあるものと

半ズボンとは言い辛い長さのものに白いブーツ。

戦闘不向きなのは当たり前である。

「うーん、やっぱり世界有数の美術館となると警備もキツイかなあ
アルには珍しく、ちよつと苦戦しているようだ。」

「そんなら、これ貸すわ。いいい? “貸す”のよ?」

貸す、を強調している意味は何だろう、と考える間もなく中を確かめた。

自然使いの力で。

『自然』なので使えるものは『自然』に関するもの。
今、中身を確かめる為に使ったのは空気。

否、風である。

「うわ、クナイから、ナイフ・・・世界各国、色んなもの揃ってる
ねえ」

感心している場合ではない。

裏口も探さなくてはならない。

「と言う訳で、ありがとう。僕行くね。」

じゃ、と手を振りその場を去った。

そして今に至っている。

「えーと、今回はお越し頂き、誠にありがとうございます。」

マリーが、始めた。

パチパチパチ、と同時に、アルが 動いた。

数時間前に見つけた裏口から侵入し、

空気を駆使しながら敵兵の居場所を見つけ・・・殺める。

もの凄い速さで。

ナイフなどの凶器も使っているため、尚更早い、速い。十分で百人
を殺めた。

「うー、、、てっごわいなあ」

「そこまでだ。」

ゴッソ、とアルの頭に冷たい物が当たる。

その瞬間。

ガウン、と。

銃声が響いた。

Vol. 2

ガウンと、銃声が響いた。

「・・・・・・・・何？」

銃声の主は煙の中を顔をしかめ見つめる。

そこには。

撃たれた筈のアルが立っていた。

左手で右手を抑えながら。

「ほう。あの体勢からずらし、除けたという訳か。」

だくだくだく、と左手から流血。

酷い量だ。

「ハア、ハア・・・・・・・・君・・・・・・・・誰？」

かすれかかっている声で問う。

「俺か？俺は」

煙が解けてきた。

そこにいたのは、世界でも一、二を争う有名な銃撃手のグレイグ・

レッゴだった。

「な、き、君は死んだんじゃ無かったの!？」

奇襲の相手はアル自ら、牢獄に送った相手だった。

「あ、安心してください！皆さん！大丈夫です！」

その頃の会場では、マリーが騒ぎ出した会場を静めようと頑張っていた。

そのとき。

ぶつつん、と何かが切れ、停電した。

ちよ、アル・・・・・・・・何やってんの!？

「ふん。ちょこまかとガキが。俺がこんなガキに牢屋送りにされたと思うと腹立たしいな」

がうん、がうん、と何発も連続で打ってくる。

「……もう百発も撃ってるのに弾切れしない！？まさか、あいつも異能力者！？」

「お前、異能力者か！？」

「ふん。俺のほうが年上だというのに、生意気な口を叩く小僧だな」と言い放ち、がががうん、と見たこともない速さ（アル調べ）で銃弾を撃ってきた。

計三発撃ったのだがその二発は両太ももにヒットした。もう一発は左腕。

「うがあああああああああつ！！」

Vol. 3

暗闇の中、マリーはただただ彼の無事を祈るしかできなかった。

お願いだから、生きて帰って！

そんな小さな願いは、果たして彼に届くのだろうか？

「ふ、巫山戯るな！右手だけは残しておいたものの！これでも俺に逆らうのか！？」

「ぼ、僕は行かないやいけない」

ぜえはあ、と息を切らしつつも彼、アルはグレイグの足をしっかりと掴み、離さないのだ。

「は、離せ！この、クソガキ！！！」

がんがん、と蹴られているのも関わらず彼は離さない。

「嫌だ！僕は、このままじゃ、マリーに守られたばかりだ！」
ぼろぼろ、と涙を零す。

それを見、次第にグレイグの足も止まった。

「・・・・・・・・ふん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

蹴られていたアルの体はもう、思うように動かない。

「貴様が欲しがってたのは、この輪っかか？ふん」

どこからか、その、綺麗なブレスレットを出した。

「！」

アルは声にもならない。

「か、返せ！」

「返せえ？元々お前の物でもないだろ」

言われてみればそうである。

言い返しもできない。

「そんじゃま、これを、こうすりやどうなる？」

異能力者の能力の銃では何でも撃てる、壊せる。

その銃を 静かに。

静かに、ブレスレットに向けた。

「！！」

グレイグは、引き金を 引いた。

七年前。

それは、グレイグが投獄された年だった。

「やめろ！離せ！！！俺を触るな！」

「足掻くなよ、銃撃手ちゃん。俺にかっちまえば、こんな雑魚さ。」

「っ！てんめえ！！！」

グレイグを仕留めた……否、捕えた彼は、

“アルと同じ”ナチュラル・マスタ自然使이었다ったそう。

どん、どん、と。

“二回”鳴った。

銃声が。

「な、女ママあ！」

マリーがパーティを抜け出し、助けに来たのだ。
そして、

グレイグが撃つ前に、あの銃を撃ち落としたのである。

「ま、りー、」

「あんたもくたばってんじゃないわよ。あんたの秘密、全部暴くまで、あたしはつきそうからね」

「……ふふ。」

「笑ってる場合じゃないでしょ！？」

「茶番はそれで終わりか？俺はさっさと終わらせたいのだから。」

「ちやこ、と銃口をマリーに向けた。」

「に、逃げ、」

「馬鹿言うんじゃないの！あたしは」

どごお、とマリーが後方に吹っ飛ばされた。

「マリー!？」

その時、グレイグは、微かに微笑んだ。

「デビット様あ」

小柄の金髪ツインテール少女がある男に問う。

「いいんですかあ？今、あのちっちゃい子、やられてますよおお」

「ふん。俺が力を分け与えてやるとでも？」

「そおじゃなくってえ。戻してはあげないんですかあ？」

「はっ。お前には頭上がらんよ」

お見通しだな、と感心したようだ。

それを見て、彼女も「やめてくださいよお。デビット様の方が凄いですう」と照れる。

そして、デビットと名乗る奴はこう言った。

「“体”はいずれ、“戻して”やるさ」

Vol. 4 (後書き)

アルって、体戻しちゃってもいいーんでしょーか。
シヨタっ子が戦うから、受けるのかなあ。

「お前！マリーに何したんだ！」

ん？なんだ、こいつ。いきなり性格が豹変したぞ？
キヤラ

こおおおおおおお、とアルの周りの空気が一変した。

砂埃が立ち、アルの周りを取り囲むようにして回転始めた。

「今まで、手加減してたけど・・・」

と、立ち上がる。

「な、お前！両腕は兎も角、両足は封じたはず！」

何故動ける！、と問う。

「僕は自然使いだ。
ナチュラル・マスター」

「そ、それがどうし　　！！」

はっ、と気づく。

そう。元々は、“人間も”自然の一部“だった”のだ。

今は自然を破壊する者となってしまったが。

その事実気づき、グレイグはたじたじ、とし、一步一步と後退した。

「くっ！来るな！“化物”！！！」

「化物？それは、誰に入ってるんだ？」

ぎろ、と睨む。

「ひいひい！」

ここまで怯えていると世界の銃撃手とは思えない。

「お前も“化物”だろ」

「　　」

その威圧と、一言でグレイグは気を失った。

マリーが起きた頃には、警察が来て、グレイグを連れだしている最中だった。

ぐぐぐ、と身体を起こし、あたりを見渡した。

アルが、いない。

「あ。。。る?」

私が寝てる間にどこかいつちゃったかな、と寂しがっていると、向こうからアルが来た。

「!」

「どしたの?どつか痛い?だいじょぶ?」

「あ、貴方がマリーさんですか?通報ありがとうございます。」

「はい?」

間抜けな声で答えた。

「ごめんね、ちょっと、マリーの携帯と声使わせてもらったのと、こそこそ言う

「え、ああ、そうです。ご苦労さまですわ」

ナイス演技である。

「お怪我はないですか?倒れていたようですが」

「ご心配ありがと。指名手配中の彼をみて、驚いたところ、つまりいってしまった。そのまま恐怖で気を・・・」

「そうですか。お身体には支障はないんですね。では」

「はい。」

にっこり、と警察の方に手を振った。

「フォローありがと。」

「声使ったってどういうこと?」

ああ、とアルが言う。

それに続けて説明し始めた。

「あのね。えーと。カラオケとかで声を変える酸素ボンベみたいな
の、あるでしょ？あれの仕組み。」

「あ、分かった！あんたの使う“空気”を微調節に微調節をかさね
て、私の声に仕立て上げたと。あつたま良いわね」

「でしょ？どこかの、泥棒ネコさんとは、違うつて証拠。」
「ごん。」

「一言多い。」

一瞬にして、彼女の気分を損ねたのである。

「いったあ！なにも、グーじゃなくてもいいじゃん！あほ！馬鹿あ
！」

ふん、とマリーは拗ね、二日は口を聞かなかったそうだ。

Vol.6 デリーター編突入

「
で。輪は？」
プレスレット

「ぬ、盗まりました。」

「なあに、やってるの！アホじゃないの！！」
せつかく協力したつてのに、と怒る。

因みに、三日後の話である。

「あ、アホって言うなよ！アホはマリーの方じゃん！馬鹿ああ！」
子供、、否、兄弟喧嘩みたいな喧嘩は日常茶飯事。

二人の頭は成長を遂げていない証拠だ。
要らない証拠。

「どうするの？私はあんたの用だったし、どうでもいいんだけど」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そ、そんなに落ち込むことないじゃない。」
流石のマリーもここまでしょんぼりされると、励まさざるを得ない。
それを伺うように、アルは下を向き、「うつ」と唸る。

「え、ちょ、あ、、、、」

「ふううつうつうつ」

泣く。

「な、何泣いてるのよ！男の子でしょ？」

「うえ、うえええええん」

「もう。仕方ないわね！探せばいいんでしょ！？」

「やったあ」

「ごんごん。」

「昨日に続き、三発目だ。」

「いったあ！！！」

「もう、知らん！！」

「ふい、とそっぽ向いた方にあるポスターが目止まった。

「・・・・・・・・試験・・・・・・・・？ああん。破れてて見えないじゃな

い」

「デリーターだよ。」

と、ある男が答えた。

「デリー・・・ター？」

「そ。手配書とか、あるだろ？」

あれに書いてある人をいち早く見つけ、捕えたものに金入るって仕事さ。

んま、お嬢さんみてえなべっぴんさんにやあ無理だろうな」
イラッ。

「まあ、べっぴんさんなんて ありがたいけど、無理じゃないわ。私が誰か知らないの？」

知るはずもない。

髪型はいつものセミロングにウィッグを付け、ロングの癖っ毛。

服装は、半袖にパーカーをはおい、ジーンズ。

あの、有名な本女盗賊とは思えない地味、かつ、やすい服装だ。

「黙れ、ナレーター。」

申し訳無い。

「知らねえなあ。そこらの有名な歌手とかか？」

げらげら、と笑われる。

それもそうだ。

ほんの数年前までは、有名だったのに。

それは現役だったから。

時代って凄いわ・・・

「マリー、こういうのって、じえねーしょん・ぎゃっぶって言うんだよ」

「それ、私のこと、おばさんって遠回しに言ってるでしょ？ 今晚夕飯なしね」

「ごめんなさい。」

土下座。

慣れたものだ。

「その、試験に、私達もエントリーするわよ」

「はっは。じょうちゃん。巫山ふざけ戯てんのか？ 女子供が
言い終える前にマリーは何処からか、小刀を取り出し、男の喉元に
当てた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なめない方がいいわよ」

にこ、と不敵に笑む。

予選

ざざぁん、と波打つ港。

そこはデリーター試験を受けるためにやってきたもの達で溢れていた。

その中には勿論、二人の姿。

「珍しいわね。あんたが率先的……否。積極的に参加するなんて。」

「え、ああ、ここにグレイグが出るらしいって」

「つはあ？どつからそんな情報？」

「んまあ、“風の”噂って訳」

「ふうん。まあ、どーでもいいけど、さ」

マリーはきよろきよろと辺りを見渡した。

グレイグ……らしき男は見当たらない。

「探しても無駄だよ。だって、途中から来るもん。」

「??」

どういう意味よ、と問いただすと、アルはそのままだよ、と答え、ゲンコツを喰らう。

「いったあい……だから、彼は途中から乱入し、試験中の誰かを襲い、なりすますんだよ」

いてて、と殴られた箇所をさする。

「よお、じょうちゃん。」

先日の、ポスター説明をしてくれた男・サグズ・エレーだ。

「五月蠅いわね。嬢ちゃんじゃなく、私には名前つてもんあんのよ。」

「

「おお、そりゃあ失礼。ひっへっへ。そんじゃ、名前は？」

「黙れクズ。お前に教える名前なんざ、ねえよ！」

「!？」

ゴン。

「おほほ。ごめんあそばせっ！」

後ろにいた、アルをずるずる引き連れ、隅に行く。

「何するんだよお！これ以上やられちゃ、体が持たないってえ！！」

「あんたのもんなんて、どうでもいいわ！！」

「ふええええええええええええんっ あほ！ばか！どじ！おば

s・・・・・・いだっ」

「次言えば、あんたの生命・・・・・・」

「わ、わ、わ、わ、わ、わ、分かった！分かったから、それしまってー！！」

マリーはどこからか、マンガでよく見る「10トン」とかかれたハンマーを持っていた。

シオイハンターの相棒か。お前は。とアルは思う。

そんな茶番はさて置き。

エントリーが始まった。

ここで一旦、予選的なことを行うのである。

『えー、皆様。今回はお越し頂き誠にありがとうございます。』

ここで、お知らせを入れさせていただきたく思います。』

なんだなんだ、とざわめく会場。

『今回、エントリー数が定員オーバー致しましたので、ここで、予選を行いたく存じます』

いっきに、ざわめく会場からヤジが飛んだ。

『み、皆様！ご静粛に！！』

「厄介な事になったわね。私戦えないわ」

「でも僕ら二人だし、二人三脚じゃない？」

僕の後ろで逃げてるだけで良いから、一緒に出てね？」

マリーは嫌々「はい」と頷く。

二人の結果は如何に？

予選2

前回までのあらすじ

デリーター試験を受けることになったアルとマリー。

だが、試験受験者が多すぎて、予選決行！？

その予選内容は！？

『えー、皆様、お静まり願います。それでは、気を取り直して、予選内容の説明といかせて頂きます』

マイクを持ってしても皆の五月蠅さには勝てなかった件。

肝心なのは、内容よね。殺し合いとか………

『簡単に申し上げますと、

あちらの港に一番に着いた方々先着で10名様ですね。

その方々が、予選突破になります』

「なんだそれ」「簡単じゃねえか」などと、苦情。

「おい、それって、殺し合いも有りなのかよ？」

ある男が問う。

肝心な点である。

『勿論で御座いますよ』

司会はにっこりと笑む。

『おおっと、一つ言い忘れてましたね。必ず“あの森”から抜けていらしてください。』

あの中で乱戦頂ければ他の住民様にご迷惑がかりませんしね、と言う。

「以上の点で終了致します。何か、ご意見など？」

マイクを外し、地声で問う。

勿論、返事は無かった。

「それでは、スタートで御座います。いつ始めても宜しいですよ」
私はこれで、というように去った。

「マリー、僕らも行くのか。ぐだぐだしてる暇ないし。」

「そうね。というか、皆さん異能力者なのかな」

「みただよ。僕と同じ“オーラ”だ。」

ふーん、とどうでも良さげに相槌を打った。

ざく、ざく、と一人の少女が歩いていった。

「うーん。僕、方向音痴なんだよねー」

ボクっ娘。

「！」

何かに感づいた様子。

足を止めた。

「誰？」

勿論、反応は返らない。

「まあ、^{オーラ}氣からして、^{マスター}使い……この試験に出てるのは間違いないよね」

一人で呟く。

両腕を鳥のように広げ、

「GO」

と呟いた。

その、草むらに居た男は、何か“ぶつかり”死した。

予選3

「ねえ、マリーさあん。俺と一緒に行きましようよお」

と、ウィンド・クリギエルが言う。

「嫌よ、変態。気持ち悪いわ。よらないで」

「な、酷いぜえ？こんなガキと一緒に行くよりは幾分ましじゃあねえかあ？」

なあよお、と問う。

ガキと言われつつも動じないアルはすごい。

がざ、がざざ、と草むらが。

「・・・・・・・・・・」

「おおつと、マリーさんは俺が守るぜ」

「結構です。というか、あなた自分の試験いいの？」

「んん？愚問だな。」

ふつ、とキザってる間に二人はウィンドを置いてすたすた歩く。

「ちょ、ま、え！？」

動揺。

仕方ない。

「来ないでって言ってるでしょ！」

ぶわっ、と泣きながら振り返るマリーに更に動揺。

「え、あ・・・・・・・・・・」

勿論、嘘泣きである。

「・・・・・・・・・・来る」

アルが、ぼそつと呟いた。

草むらから、女の子が。

「ふえ？」

その子はそういった。

「ああ、同じ、受験者さんですか？」

につこり笑って首を傾げつつ問う。

何ともかわいらしい様子。

「あ、僕、コリッタ。コリッタ・モウ！」
ボクっ娘らしい。

「えーと、君、僕と同じ年？」

と、アルが問う。

「何言ってるの？ “アル君” は、、、、、」

言い終わる前にパシ！と、口をふさがれた。

そして、小さな、マリーには聞こえない声で。

「言わないで」

どうやら、何か隠し事があるらしい。

「見てくださいよ、マリーさん。いい感じじゃ、ないですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事来ず。

「んもっ、照れちゃってえ」

とじらすと、「五月蠅い」と一喝された。

「ふふ。ねえ、動かない方がいいよ」

と、マリーのもとへ帰ろうとする、アルに言った。

「？」

「きゃああ」

アルがそれに構わず、足を一步踏み出した所で、マリーの悲鳴が聞こえた。

マリーの周りには、ハリネズミのようなものがかこむようにして“あつた”。

「それ、僕の武器。かわいいでしょお？ うさぎちゃん？」

ふふ、と笑う。

「・・・・・・・・・・僕って言うの、直したほうがいいと思うよ」

「あはは そだねっ 君とキャラかぶりしてるしい」

きゃはは、と愛らしく笑う。

そして、「でも」と続けた。

「君が“あの姿”に戻りさえすれば、僕は僕のままで済む。ふふ。」
不敵に再度笑む。

「言わないでって言っただろ……」

「ごとおおおおつ、とアルの周りを何かが纏^{まと}った。

「口封じ」

「おお？いいの？アル君が動けば」

「いたっ」

ハリネズミが、マリーの足をつついた。
痛いだろう。

「これは、まあだ序の口。これ以上動こうとすれば、僕のうさちゃんが一斉に彼女を襲う」

可愛い顔して発想が怖い。

これで女の子なのだから、もつとだ。

また、ふふ。と笑う。

「……………」

黙りこくるアルに、コリツタは“両手を鳥のように広げた”。

そして、口にした言葉は

「GO」

彼女はまた、微笑んだ。

予選 4

「GO」

その一言で、コリッタの後ろにいた、うさぎが動いた。

広げた手を、前でクロスすると、後のうさぎが一斉に飛んだ。

アルに向けて。

「ぐ、あああっ!？」

しかも。

つい、さっきまで、“ただのうさぎだった”のに、アルに当たる頃には、ハリネズミと化していた。

ハリネズミフォーム
「針鼠型」

「キューッ!」

と、うさぎたちは可愛らしく鳴くのだが、アルにはそう聞こえない。

「ただのうさぎと思っちゃだめだよん」

にこ。

だが。

「ピギユイイイイッ」

と、避難し始めたのである。

「あ、火だ」

と。

あっさり、コリッタは理解した。

このうさぎたちの弱点は火なのである。

「ぬう、わかるのはやいねえ」

んま感心してる場合じゃないけど、と転換。

「……………動かずにでも、攻撃は出来るんだよ」

「知ってるよ？僕だって、、、、んー“あたし”だって出来るもん」

また、両手を、広げた。

「だから、それはもうつつじ」

ごおおおおお、と炎が。

「そ、それ、僕の力………」

「ふふ。 “あたし” の力はうさぎ^{それ}だけだとしても？ 無能^{それ}だなあ」

「アル！」

後ろから声が飛ぶ。

マリーだ。

「その子、さつき調べたら、うさぎだけじゃない！」

「ど、どういう意味？」

「教えてあげるよ」

につこり微笑んで言う。
そして。

「 “あたし” の武器は」

「その子の力は」

「 “念動力” 」

「ふふ。 分かったあ？」

くすくす笑う。

「でも、念じて動かすだけでしょ！？ じゃあ、何で僕の技を盗んだの！？」

「それが、偏見って、言うんだよ。」

“あたし” のは三タイプ位あるんだ、と。

「三、、タイプ！？ 」

「そう。」

？ 念じて動かす力

？動くものを念じ、使う力？

「三つあるって、聞いたんだけど、三つ目が未だ掴めなくってえふふ、と笑う。」

「動くものを念じる？意味がわからないわ！」

「んーとね、まあ、簡単に言って、、、、、他人が動かしたものを使う」かな」

言わば、超能力のようなもの。

アルが最強ならば、それをみれば、コピー “せざるを得ない”。

「“あたし”の念動力は、特別なんだあ」

軽やかに笑う。

「さあ、どう、戦う？」

「俺もいたんだぜ」

後ろから、ウィンドが。

コリッタの首を狙い、来た。

「やめて！」

それは、誰に言ったのだろうか。

勿論、コリッタ。

「お兄ちゃん。君、学習能力へんきようしたほうがいいよ」

またも、軽やかに笑った。

「でも、どうしよっかな。これいじょうだと、“あたし”が悪者だ」と言って、手を振った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・コリッタ・・・・・・・・・・・・・・・・」

予選4（後書き）

ツカレタ。。。。

というか、こんな小説に読者様いらっしやるのかぬあ？

同じキャラどうしよう

予選5

ざく、ざく、ざく、と死体の上を歩く一人の女の子
(と、言えるように言えないような微妙な年代の)。

「デビットさまのためなっら」

とおもしろ可笑しい変な歌を歌いながら。

彼女は、何だかの力を利用して、こいつらを倒した。

「デビット様の為にもお、さっさと、ちびっこいガキンチョ殺さないと、ね」

顔に着いた返り血を、ぺろりと舐め、不敵に彼女は微笑んだ。

どき、とマリーとウィンドが倒れた。

「な、何をした!？」

「そお、怒らないでよー?こわあい」

にへら、とこの状況でも微笑む。

「寝かせただけ。このお兄ちゃんはお兎も角、お姉ちゃん、相当参つてみたいだね」

「………そうだな。僕もその男はどうでもいい」

可哀想に。

「“あたし”が途中まで、……いやあ、最後まで運ぶよ」

「何のつもり？」

「詐欺心?ふふ。偽善心かなあ?」

「巫山戯ふざけんな」

「わお、怖いっ」

冗談だよ、というかのように笑む。

本当によく笑う子だ。

「・・・・・・・・・・ありがとう。」

「？」

森も終盤に来たところで、アルはマリーを担ぎつつ、こういった。

「ふふ。ちゃんと、言えるんだねえ」

「し、失礼だな」

「ふふふ。まあいいけど。あ、出口」

コリツタが言い終える前に、横から、何かが飛んできた。

「いたあ みつけたあふふふん。んじゃ、早速う、死んで？」

ルナエラ、である。

「っ！ルナ！」

「あれ？その愛称知ってるってことはあ・・・・・・・・あんた、アルじやなくて、ほんつとに、ア・・・・・・・・」

ゴッ

顔面に、パンチがクリーンヒットした。

そのまま、数メートル飛ぶ。

「その名前呼ぶなよ・・・・・・・・」

アル、やつぱり、マリーには知られたくない過去・・・・・・・・あれか。

ばらばら、と木の間からルナエラが出てきた。

「何するんだよ・・・・・・・・あたしの、顔、どうしてくれるのさあ！？」

ぎろ、と目を開けた。

充血していて、まともに見えていないだろう。

「殺す、殺す、ころおっす！」

どぎ、とコリツタは背中のウィンドをおろした。

「ここは、僕がやる。」

予選6

「だめだよ！僕だっで一緒にする！」

「だめ。君は、、その人と一緒に来たんだ。ちゃんと、責任がある」

「ごす、と殴られた。」

勿論、かわしたつもりだったのだが。

「イタっ！何するんだよ、君！」

「五月蠅い、うるっさーい！マリーはキザ野郎連れて先いったもん！僕も協力！」

ふん、と荒い鼻息をたてた。

「・・・ふん」

コリツタは、少し不機嫌気味で言った。

「君はそんなに闘いたいみたいだね」

と、アルは黙る彼女コリツタに言う。

その時。

びゅうおお、と風が起きた。

「茶番は此処までいいでしょあ」

怒っている。

相当。

「うわあ、ちよつとやばいかなあ」

「ふうん。じゃあ、アル君はその程度なんだね」

「な、どういう意味！？」

「仲間割れえ？ひひっ丁度いいなあ」

ざ、ざ、と近付くルナエラ。

「「残念」」

「なっ！？」

連係プレー！

“残念”の直後に、コリツタは「GO」とは言わずに、うさぎを作動した。

その前には、アルが“氷”で相手の動きを封じた。
足を凍らせ、動けない状態。

そこに、うさぎが来る。

「ふ、巫山戯ふざけ」

当たる、当たる。

「後半からは、針鼠型ハリネズミフォーム！！」

が。

当たらない。

「え？」

「図に乗るなよ」

何処からか、男の声が聞こえる。

「！この声！まさか、お前！」

「そう。よく覚えていたな。俺だ。」

煙のなかから現れたのは、デビット。

「げほ、げほ、すいません。デビット様あ」

ぼろぼろと、涙を零しているルナエラに、

「お前はもう、帰れ。」

と命じた。

「で、でも……」

口答える彼女に

「さつさと帰れって言ってたんだよ」

と、静かに、かつ、喜怒哀楽の感情を全て捨てたようなトーンで言う。

「……はい」

ぱきん、と足についている氷を無理やりはがし、
デビットが現れた、「門」から消えた。

「それでは、君らは先にいけ。」

「は！？僕をどうにか、しないの？」

アルとデビットが話を進めている時、コリッタがアルの袖を引っ張った。

「誰？この人」

と問う。

そういえば、コリッタはこいつのこと、知らないじゃないか。と思う。

これ以上、巻き込ませたくない、と考え、

「・・・・・・・・分かった。行かせてもらう。だけど、今度会ったときは・・・・・・・・」

「ははっ 威勢がいいな。まあ、覚えておくとするさ。」

くるん、と一回転し、まだある「門」の方へ向いた。

そして、振り向かないまま、こちらに手を振った。

「・・・・・・・・」

「じゃあな、」

壊した、無くした、落とした、消した。

忘れた 筈の名前を呼ばれた。

予選7 出航

“アル”という名前は、偽名では、本当の名は？

そんなもの、遠の昔に捨てた。そう。

遠の、、、昔に。

『えー、あと、五分で出航致します』

「ちょ、何言ってるの！？まだ、七人じゃない！」

『規則は、規則です。』

時間になり次第出航になります、と一言いい、マイクを離して去った。

「どういう事なの！？もう……………」

アル！無事に戻りなさいっ！

ここまで思うと保護者のようだ。

「ぐ、、、、先に行けとかいつといて、

ちやっかり異空間に閉じ込めてるじゃないか……………」

「どうしよう！マリーさん達は脱出出来たらしいけど」

「空間をねじ曲げる……………何か、大きな衝撃を与えれば」

「雷、とか」

コリッタが言う。

「！」

アルが、思いつく。

「僕、出来るよ」

「え？」

ぼおおおおお、と出航の合図が鳴る。

間に合わなかった………

船が、出航した。

「アル………」

ばしゃしゃしゃしゃ、と海が。

マリーは疲れているのか、

テラスにもたれかかったまま、居眠りをしていた。
危ない。

「マリー！」

いきなり、声をかけられた。

びくっ！と飛び起き、目の前を見た。

アルが、いた。

「あ、アル！？」

と、コリッタ。

はあ、はあ、と息をきらしつつも

「マリー、ただいま」

と満面の笑み。

「もう！」

マリーも安堵のようだ。

船内

「えー、改めまして。本試験の司会進行役を務めさせていただきます」
と、船内のパーティホールに声が響き渡る。

「私、リリユエルと」

軽快なリズムで。

「俺、アニユエルで」

「お送りさせて貰いまーす」

ふたりは言った。

「へえ、双子の司会進行？可愛らしいわね」
その言葉にアルはむっと拗ねる。

「ありがとうございます お嬢様」

いつの間にか二人の目の前にリリユエルが。

「！」

「ですが、一応、能力者で御座いますので」
と言って瞬く間に消えた。

「ど、どういう能力なのかしら……」

「異空間。」

「！」

「異空間を操る子だ」

「当たり前」

すうつうつうつ、と何処からかりリユエルが。
体の半分がなく、浮いている。

のではなく。

半分だけ、異空間に体を沈めているのである。

「こんなに早く見破られたのは初めてだよ、坊や」

「坊やじゃない」

「へっへーん？“マリーには言いたくない”って言った口はこの口

かなあ？」

アルの背後からリリエルの右腕が出てきてアルの頬をつついた。

「っ！」

いきなりの行動に赤面する。

「わあ、ぶにつぶに それにしてもお宅の“息子”可愛らしい」

「なっ！」

カチン、と切れるマリィ。

“息子”というワードは「マリィさん老けてますね」と取れたのだから。

「ふっざけんじゃないわよー！！あたしはそんなに老けてなあああああい！」

むきーと暴れ始めた。

それを見て、につこりとほほえみ、異次元へと消えた。

「こんにちはあ」

マリィの怒りが収まった頃、アニリエルが歩み寄ってきた。

「えと、君は？」

「ああ、申し訳ありません。お姉様」

につこりと天使のような微笑みを二人に傾けた。

“お姉様”というワードがマリィの怒りをもっと和らげた。

「俺は、リリエルの双子の弟。アニリエルです。」

「弟なんだあ。格好いいね」

「ありがとうございます。」

これもまた。

笑顔。

「先程は姉の御無礼をお許し下さい。」

ぺこり、と謝った。

律儀なこだな、とマリィは思う。

「マリィさんも、大変ですね。こんなガク……おっと、お子様と旅なんて」

カチン。

「ちよっ！」

これまたワードに反応する。

アルは子供扱いされるのがイヤなのだ。

そしてさっきの繰り返し。

ぎゃあぎゃあ、と騒いでいるアルとマリーの部屋にリリユエルが入室した。

「あ、アニユエル。始まるよ」

「ああ、その時間かあ」

といって、ふたりは異空間に去った。

あと十分で“会”が始まる。

船内（後書き）

アニュエルの一人称を「僕」にしたかったけど
これ以上増やすと大変だから、やめた

船内？

きゅ、と栓が閉められる音がした。

バスルームからだ。

マリーがお風呂に入っていたのだ。

バスタオルを体に巻いたマリーが出てきた。

湯気が立っている。

「ふう。すっきりしたあ。というか、この部屋ほんと広いわね」
何置あるのだろうか。

ホテルのスイートルームの五倍はありそうな大きさ。

「参加者も、十人に絞ったからねえ。相当、、、少なくとも無理だね。」

船はこの豪華さに反比例し、意外と小さい。

（そこまで小さくはないが）

そんなとき。

コンコン、とドアがノックされた。

「ちよつと待って。着替えるわ」

「あ、出なくて大丈夫ですよ」

答えたのは、リリエル。

「・・・・あんたみたいなガキがあたしに何の用？」

「あはは お昼はすいませんでしたっ（ゴンツ）いたあ！？ああ、そおじゃなくって」

「??」

「メンタルテスト、するので大ホールに集まって頂けますか？」

以上です！と軽やかな声で去っていった。

「メンタル・・・テスト？」

ぽっかーんとしたマリーは何となく遅れている様に察し（遅れていたので呼びに来た）

「そ、そういえば、アルがない！あいつう！！」

あたしを置いていきやがったな！と恨めしい顔で壁を睨んで居た。

マリーは長めの黒パーカーに桃色のジーパン。

「あ、アル！なにしてるの？あたし置いてったでしょ？」

「げ、マリー！！！ごめん。あのね、コリツタと話してたの」

「コリツタあ？ああ、あの女の子？」

「こんにちはあ！」

とコリツタは姿勢よく、手を上げ返事をした。

こうしてみると、普通でどこにでもいる女の子だ。

「ねえ、メンタルテストって？」

「わかんない！多分、デリーターとして重要な精神力とか見るんじゃない？」

とこたえるアル。

「違うよ、アル君。」

それに、反論するコリツタ。

「？ 知ってるの？」

「うん。あれ？二人とも、あたし（矯正した）のこと、知らない？」

どういう事、とマリーが言う。

「んん？アル君は知っててくれたの？」

「うん。通算五回目のデリーター試験受験者だろ？しかも、どれも合格」

コリツタ幾つだよ。

「あははっ 合ってる合ってる

でも、それは、先祖代々の事。

あたしは、えーと二年ごとに行われるリバーサー試験も含めて、、、、

これで、五回目かな。うん、間違っではないね」

長々と説明してくださった。

その、コリツタの言葉を聞いてマリーは、
「はあ！？あんた、どんだけ凄いの！？」

「あはっ そんなすごくないって」

笑って続ける。

「むしろ、初参加のくせに実戦もままならない、君らのほうが凄
い」

皮肉、だ。

それも華麗にスルーし、ふたりは周りを見た。

「デビットはいないみたいだね」

ぼそつと呟いて安堵した。

ごごうん、とマイクが触れられる音がした。

会場は一斉にざわつき、マイクの方へ耳を傾けた。

「えーと、あ、おっひさっしぶりっ！」

リリユエルが言う。

『メンタルテスト、始めるよ その前に』

ぴ、とカーテンへ指を差した。

『警護さあん。不法侵入者、ちゃんとみつけないでどーおするん
ですかあ？』

なんとも、言い辛い。

はつきり言って、ドSな表情で。

言った。

ざざざ、と警護達はそのカーテンを囲み、取り押さえられた二人。
予選で脱落した者が、黙って侵入したのだ。

「厳しいわね」

『じゃあ、開始するよあん。女子の人は、私がするね！』

そういえば、コリツちゃんから結局聞きそびれたわね。

それにあの子、リリユエルいつの間にかタメ口だし。

一抹の不安？を抱えながら、そのテストは始まった。

未だ、アニユエルの能力は不明である。

船内？（後書き）

不明とか書いてあるけど、もう、決まってますけどね。
W
W

船内？

今、コリツタのメンタルテストの最中だ。

「長いわね。今、えーと一時間ちよつとかしら？」

腕時計を見る。

そして、周りも見渡す。

意外と女性いるのね。

ちよつと安心する、マリィ。

「あの、マリィさん、ですか？」

一人の女性に声をかけられた。

「お次どーぞ」

入ってきたのはアル。

ここはどうやら、男性のメンタルテストの会場らしい。

「おやあ？アルさんですか」

「五月蠅い^{ごもつこ}な。それより、始めるんでしょ」

妙に落ち着いた様子。

「あ、この椅子に座って、この薬を飲んじゃってください」
ビンの飲み薬を渡された。

透明で透き通っていて何が入っているは分らない。

「ふうん。眠り薬。」

「！ 流石。ご名答。」

ちよつぴり引きつった笑顔で答える。

「まあ、中身も分かつてるけど、一応飲むよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゴクン。

飲んだ瞬間、眠気以前なものが襲った。

態勢は崩れないまま、そのまま深い、深い、眠りに落ちた。

「さて。入らせてもらいますか」

アニユエルは額に手を置き、目をそつと閉じた。

ぎゅうううん、と走馬灯の様に脳内へ侵入した。

『ふむふむ。なるほど。 “この名前” は偽物なのか』

“小さなアニユエル” が脳内でその場を一回転したところで、あるものが目に入った。

『I・・・・L・L?・・・・I・・・・ル?』

『イルって、誰だ?』

アニユエルの目の前には一つの“黒い箱”があつた。

それに、白い文字でこうつづられていた。

I
L
L

と。

それに、触れた瞬間。

一気に意識が現実に戻された。

「ヤバイ！患者の精神状態が！」

と、顔を上げると アルが、、、否。“イル”が立っていた。

「ありがとなあ、アニユエルさんよお？」

と言つて、アニユエルに、アニユエルの顔面に手の平をかざした。

「じゃあな」

黒い光を帯びたものが、当たつた。

ーと同じ大きさになった。

「みんなを助けて！」

「キュー！」

ワーブルーム
「異次元の隙間！」

リリエルは異次元を利用し、多くはないが人を救って行った。

この技、力消耗激しいから、嫌なんだよなあ。

肝心のマリーと言うと。

さつき知りあった、“改人”^{カイジン}のゴッド・スパークと少ない人数であるが

人間を救出していた。

「あ” あん？何だあ？ “邪魔” してる奴らは？」
イルが、四人を見て言う。

「女子供が大の男に加勢しやがって。クソが」

俺の強さを思い知らせてやるよ、と言う。

彼女らに、また、黒い光を帯びた手を向けてこう言った。
ブラック・エンド
「世界の終わり」

船内？（後書き）

何か後半から、自分の前作品のキャラもじってるし。
技名の、センスの無さがにじみ出てるじえ。

うおおおおおおおおおおお・・・

船内？

「ブラック・エンド
世界の終わり」

イルは手を四人に向けてその言葉を放つ。

そして、てから黒い妙な光が出て、四人を襲う。

だが、その力は惜しくも避けられた。

「・・・・・・・・何？」

ぱらぱら、と壁や天井が崩れているが、“四人の周りだけ”崩れていない。

「あんた、元アル・ペイズリー？だから何？許さない」
そこにいたのは、ゴッド。

「・・・・・・・・・・はあ？」

偽善者のつもりか？、と言う。

「偽善者じゃない。私が本当の、善。」

「ふん。お前が本当の善なら、俺は本当の悪だな」

「それもそうだね」

相手に気を緩めるようにし、目を閉じた。

「なめてんのか？」

「・・・・・・・・」

「聞いてんだよ！お前にい！！！！！！」

今度は両手を。

ゴッドに。

向けた。

「同じ技ばかり、やめなさ」

「消し飛べ、無ゼロ」

「え、は、ああ！！」

「ワーブルーム
異次元の隙間」

その攻撃を、異次元へ、流した。

「り、リリユエルさん！」

リリユエルは、見てからして、もう、倒れそう。

「・・・・・・・・・・」

「　　！ねえ、一緒に、映画、見に行かない？」

古い名前を呼ばれたきがした。

あいつは誰だろう？

僕の、名前、知ってたな。

「　　！」

その名前で呼ばないで。

今は、その名前じゃない。

僕の、名前は

何だったかな。

「　・・・・・・・・・・あり・・・・・・・・・・が・・・・・・・・・・と」

どうしたの？

今にも死にそう。

あれ？ねえ、目を閉じないで。

“君は、誰？”

“僕は、何？”

「あなたは、あたしの、大事な人なの！」

「ぐがつ・・・・・・・・」

“マリーが”言う。

その傍には、アニユエル。

「精神状態が不安定だ。。。」

自分が何かさえ、分かっている、と伝えた。

「・・・・・・・・アル・・・・・・・・」

「違う！違う！違う！！！！」

「や、ヤバイ！混乱している！」

イルは、頭を抱え込み、もがき始めた。

何かに抵抗するように。

そして、こう言った。

「俺は、誰なんだ」

船内？（後書き）

後半意味不明なんすけど

船内？

「俺は、一体、誰なんだ!？」

「……おー、いー、うー、あー、んー」

「大丈夫。」

妙に落ち着きのある声で言う。

「イル。聞いて。」

「五月蠅い！」

片手で頭を抱え、もう、片手をマリーの方へ向けた。
ブラック・エンド
世界の終わりの態勢だ。

が、その攻撃はマリーには当たらない。

否、
“ 当てられない ”
。

「う……ああつ！邪魔、すんなあ！」

何やら、藻掻き始めた。

“中の”アルが邪魔でもしているのだろう。

凄い抵抗力だ。

┐
•
•
•
•
•
•
?
└

「マリーさんには、分らないと思いますが、今、アルさんが、心の中で戦っているのです」

「ふうん」

「え、興味ない感じですか？」

「まあね」

「あたしは、アルを信じるしか術はないのよ」

寂しそうに嘆く。

「……この試験で唯一、力持っていない人だもんなあ。健気だよな、とアニユエルは思った。」

数分後

ずずずずずず……

「……こ、コリッタちゃん、次、入って」

「あ、はい！」

リリエルは未だ、異次元を利用し、受験者を避難させていた。体力もほぼ、限界だ。

コリッタが入った所で膝をついた。

「うぐっ」

汗ぐっしよりで、相当疲れているみたいだ。

「リリエルさん。休んでていいんですよ!？」

「だ、駄目。皆さんを無事に送る。それが私の使命なの。」

それじゃ、死んじやう!!

ゴッドは周りを見渡した。

マリーがいない。

「……………つ!!」

残ったのは、二人だけ。

「脱出した!? そんなはず無い」

焦りながらも冷静さを取り戻しつつ、探す。

すると、もう、海が迫っている部屋にふたりは居た。

「お、お前を殺せば、俺はアルという名の呪縛から抜け出せる。そうだろお？」

左手で頭を抑えながらイルは言う。

「……………」

その問いにマリーは答えなかった。

「言えよ」

イルが切れつつも、もう一度問う。

「マリーさん!逃げて下さい!」

そこに、ゴツドが一言入れた。
「邪魔、すんなつつただろ」
ゴツドに片手を向けた。
「死ね」

船内？（後書き）

始まり方と終わりがワンパターンなのを直したいかと思っています。
癖は嫌いです。

船内？（前書き）

船内編をこの話で終わらせるためにいつもより長めです。

船内？

それは、本当に昔のことでした。

“アル”と言うあだ名の男の子は、悪い奴に家族全員を殺されてしまいました。

もがき苦しんだ結果、一つの悪い人格ができあがりました。それを、“イル”と名付け、共に旅をしました

イルが発した、技は何者かによってゴッドたちを避けた。

デス・デステニー
「運命崩し」

「・・・・・・なっ」

イルをも絶句した。

「これ以上、敵と言い、攻撃されるのをしずしず見ている分けにはいかんのでな」

そこにいたのは受験者。

ゴーズ・ゼルイズだ。

「！ ゴーズさん！」

「大丈夫か？お嬢さん」

「アル！聞いて！」

マリーは心の中にいる、アルに話しかけている。

「あなたは一人じゃない！あたしがいるじゃない！だから、頑張つて！」

あたしには今それしか出来ないけど、と悲しそうに続ける。
その言葉の後に、

「うつ、あつ、うがああつ」

とイルが呻き始めた。

「!？」

「離れて下さい！」

と、アニリエルが言う。

「全ては僕の責任です！僕が封じます！」

右手で左手の手首を抑えてイルに向けた。

その手からは白い光が出て、

イルに放たれた。

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

ずごくごくごく、と受験者らが乗っていた船が沈む。

それを、受験者らが上から見ていた。

そう、空から。

「はあはあ、こ、これから、日本に移動します」

リリエルはここまでやるのか、という位よく持つものだ、と皆関心している。

殆どの人間を転送した。

だが、リリエルの体力がない上、まだ人は残っている。

残っているのはリリエル、ゴッド、マリィ。

空中にいたリリエルの態勢はぐらりと崩れ、海へ真っ逆さまに向かった。

「り、リリエルさん!？」

それを、ゴッドがつかまえた。

「どうしましょう……これじゃあ、私たちだけ」

「大丈夫、私がなんとかする」

ゴッドが言う。

「マリー!」

日本の会場に着いた途端、アルが駆け寄ってきた。

「あの、その、ご、ごめんね?」

「なあに改まってんの? んなもん気にしないわよ!」

ニツと笑ってみせた。

「というか、どうやってここに?」

船内？（後書き）

ほんとだよな。

全部アニエルがいけないんだよな。

なんでここまでなるんだよってぐらいおかしい結果だよな。
アニエルエ・・・

休み

「ふうん、成程。ゴッドさんが。」

話を聞いたあと、マリーはこう続けた。

「ちゃんと、お礼言っておいてね？あたしを助けてくれたんだから」
そう。

このテストでは、ペアや複数で出場した場合、
以下の物に当てはまれば失格となるのだ。

？片方が負傷、又は死。

？片方が行方不明。

“二人”で合格だから、アルはゴッドにお礼を言わなければならない義務があるのだ。

試験の開いている側が今回の事件は私らの不注意の所為、と一週間
休みをくれたのだ。

大ホールでは、身体を癒すパーティ（逆に疲れる）を行っていて勿
論、マリーも出席しているのだが
肝心のゴッドがいない。

仕方なく、部屋を訪れることにした。

こんこん、とドアをノックし、

「あの、アルですけど」

と一言。

「はあい？あーあのちっちゃい子かあ。」

「余計なお世話です」

ドア越しでもむっすりした表情が伺える。

お邪魔します、とアルが入室。

因みに、マリー以外の女性の部屋に入るのはこの小説始まって以来初。

「やあやあ、ちびっこくん。あたしに何かようかい？」

陽気な声でむっすりと拗ねているアルに追い打ちをかける。

「ふん。どうせ僕はチビです」

「あはは そう拗ねなさんな “子供じゃあるまいし”」

「っ なー？」

「えー、なんで知ってるかって驚いてるでしょー？ふふん。

たーだの女だったらこーんなちっけなものに参加しないーっての」

「よく喋るな」

へへへ、とゴッドは笑い、きらきら光る、長い髪をかきあげた。

「生憎、あたしは彼氏持ちだから、おにーさんにはキョーミ無いよ」

「あーそーですかあ」

「んま、今はあたしの方が年上みたいだけど？何、それ、呪い？」

アルは「はああああ」と大きなため息をついて、

「あのなあ、何処の女だからしらんけど余計なせんさ」

ゴッドは最後まで話を聞かず、ある免許証のようなものを見せた。

警察手帳。

「偽造だろ」

「あり？バレた？」

有名技師にせーみつに作ってもらったんだけどなあ、と。

「………普通の人間ならわかんねえよ」

「でしょうね。あたしは、あんたの元が気になってるの。本部には

悪いけど、単独。」

ゴッドはアルから視線を外し、部屋の中をあるきはじめた。

何かを探しているようだ。

「だからさあ、キューケーとか、どーでもいいーんだよねえ」

机の引き出しから聖書バイブルを出した。

そして、パラパラ捲る。

「ほお、コワ」

あるページで止まる。

そして、アルにこっちおいでというふうに手招きした。
そしてある程度寄ったところで

じゃこん！

と銃口を向けた。

「手をあげるおー
・・・・・・・・・・・・・・・・なあんつつて
ねえ」

反射的に手を上げたアル。

「あはははん」

この女。

ただ者じゃねえな、とアルは呟いた。

「さあ、クイズです！何でこんなトコに銃があるんでしょー？」
無邪気に微笑んだゴツドの笑みには何か腹黒い物が潜んでいるようにも見えた。

休み2

「なんででしょおか!？」

と問い詰める。

「あのさ、その前にそれ、下ろしてくれねえ?」

「あはははは だいじょーぶ」

と言って、おろした銃口を自分の頭に向けた。

「ちょ、おまえ!？」

だああああん!

「嘘ですー 音だけですー」

「.....」

「えっへーん さつき抜いたんだもーん」

「さつきっていつ?」

まあそれは置いといて、と無視。

「用事、あるんじゃないの?」

持っていたバイブルを本の場所に戻した。

「あーうん。えと、さつきはマリーを助けてくれてサンキュ」

「ふうん。」

その言葉を言うときさつきまでにつこにこ微笑んでいた顔が無表情、かつ、目が冷たい。

「な、なんだよ」

「いや?何でも無いッスけどお?」

何となく不機嫌だと取れる。

それを見て、アルも不機嫌。

「で。バイブルの答えを聞きましょう」

「ああ、えーと、ここは元々普通のホテルだったんだけど

」

ある日を境に、高級ホテルになつてしまった。
いいホテルなのだが、侵入防止システムが浅かった。
その為、使用できるのは銃を使える限られた人とし、
その人らが持ち合わせてなかったときに

「　　つてというのが僕の推理なんだけど」

「ぶーっぶー！はあっずれえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「銃を使える人が持ち合わせていない？なにそれ、あつはウケるっ
！ないない！だつて」

「だつて？」

「銃使える奴だつたら元々持ち歩いてるでしょ」
確かに。

自分の身を守る為必ず持ち歩いている。

「何か合つたとき、ここのホテルの従業員があたしらを殺すため。」
笑顔で言つた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

成績と態度の悪いものには罰があるじゃない？、とにこやかに。

「いずれはあたしたちもこーんなきつたないところで死ぬのかなあ」
いやだなあ、と呟く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・試験は俺らが勝つ」

「あはっ　別に勝ちたいから出たわけじゃ無いからね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

休み2（後書き）

まだまだ続く、二人の会話！

休み3

『・・・・・・・・・・・・・・・・ん』

『・・・・・・・・・・・・・・・・えん』

『ふええええん』

ある時、ある場所で、ある女の子が泣いていた。するとそこにある男が現れた。

その男は言う。

『君は強い子だ。』と。

『どうして?』

その言葉に少女は問う。

『私は魔法使いだ。君の未来が分かる。きっと、強く綺麗な女性になるだろう』

『ふうん』

『おおっと、興味ないかい?』

少女の反応に軽く笑みを浮かべる。

『じゃあ、私、どんな人になるの?』

『そうだなあ。いや、教えられないな』

『なぜ?』

男はふふ、と笑い、

『私は未来から来た。だから、未来を崩すような行為は避けなければ』

『おじさんがここに来ている自体ダメじゃないの?』

『・・・・・・・・・・・・・・・・やめないかい。これでもまだ25だ。』

『

『そうなの?じゃあ、お兄さんね』

その可愛らしい笑みに男はふつ、と微笑んだ。

『お兄さんのお話、面白いなあ』

何分話しただろう。

いや、何時間？

何日？

『さて。私はそろそろ行かなくては』

『どこに？ここから近いの？』

『いや。遠い、遠い、凄く遠い所だよ』

少女は男の袖を掴み、

『私も一緒に行く！』

『．．．．．！』

男は少女の手を振り払い、こう言った。

『君は来てはいけない。』

『．．．．．何で？』

『そのうち、わかるさ』

男は、少女の額にキスを落とし、去った。

男が去った跡を認められなく、少女は幾日も幾日も、その場に立っ
た。

ある日、行ってみると、ひと切れの紙が落ちていた。

真っ白の。

だけど、見たこともないのに、何故か懐かしい香りがする。

あの人からのメッセージ。

そうじゃないかもしれないけど、でも、きっと。

その少女は未だにその紙を持っている。

「あれ、マリーさん。何か落ちましたよ」と。

アニユエルが紙を拾う。

「あ、ええ。ありがとう。これ、大事な物のマリーは大事そうにその紙をしまった

休み3（後書き）

回想長過ぎたね。うん。

いちいち力ギカツコを変換するのめんどかった。
はああっ

休み4

「さあさあ、皆さんっ」

両手を広げた例の双子がステージに現れた。

「ようやく苦難を乗り越えて、日本へ！」
が。

ブーイング。

「てめえらの所為だろーが！」 「何、他人事みてえな面してんだよ！」

「え、あ、ちょ、うああああっ」

押し寄せる人々。

まあ、これは、「ざまあみろ」なんだろうけど。

「ふー。ギリでパーティーとやらには間に合ったみたいだねえ」

アルとゴッドは部屋棟ルームの方から出てきた。

「とやらって……」

アルは、ため息を漏らした。

ゴッドは一応パーティーなのでドレス。

ちよっと大人っぽい。

「失礼なナレーションだな。 まあいいけど。さてえ。」

と、呟き、マリーを探した。

「………クスッ アル君を置いて駆け落ちとかああ？」

あっははと爆笑。

笑い事では無いのだが。

まあ、確かに。

マリーがいない。 怪しいと思えば、会場のすべての人間が怪しい。
ふと、思うと。

コリッタもないではないか。

「・・・・・・・・・・ふむ。」

「何か分かったのか？」

「あーうん。なんか、コリッタちゃんとは何処か行ったらしい」
その何処かが肝心なんだけどなあ、と嘆く。

悪いことに巻き込まれてないやいいんだけどな。

「あーっ 他人、信じてない表情ねえ」

「・・・・・・・・・・悪かったな。」

意外とあっさり認めた。

「ふうん。探さないんだ？ガールフレンド」

「・・・・・・・・・・っ！」

「うそうそ。ガールフレンドは“女友達”でしょっ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「沈黙ながっ！」

あはは、と笑う。

数分ゴッドの話に付き合い、呆れかかったその頃に、
マリーらしき姿を見つけた。

呼んでみようと思っただが、他人だったら、
という一抹の不安があり、あっさり中断した。

何時の間にかゴッドも何処かに行ってしまった。

「置き去り、か。」

はあ、と落胆し、辺りを見た。

がやがやと賑わっている。

何せ、パーティだから。

だけど、参加者が少ない割には何故か人数が多い。

「世界各国のセレブとか、金持ちやらが集まってるんだよ」
と。

ウィンドが。

「あの、女の人にしか興味ないんじゃないの？」

「んんー？愚問だね！ 君のパートナーはあの、

マリーさんだろ？今のうちに氣イ利かせねえとなっ
愚答である。

「・・・・・・それ、マリーにいつとくね」

「やめてえええ！？」

何処を探してもマリーの姿は見えない。

「どうしよーう。」

これだけ見ると子供みたいだ。

ガラガラ、と何かが大きく崩れる音がした。

！？

アルは一瞬嫌な感じがよぎった。

休み4（後書き）

自分の作品は句読点が多いです。
なぜでしょう。

誰かの影響なのです。

小説家の。さあ、誰でしょう。

まあ、絶対に分からないですけど。

ギブアップしたら俺に聞きに來てください。

休み5

がれきを掻き分け、マリーを探す。
死んでいたら、試験が。

否、それ以前。

いなくなってしまったら………

「マリー！マリー！！！！」

後半、泣きながら、探す。

失格になってもいい。

生きてくれさえばそれでいい。

二度と。

同じ事なんて。。。

「うぐ、ぐずっ」

ガレキに足を取られつつも、どんなに痛かろうとも。
探す、探す。

「ま、り” いいつ」

すると。

がらら、と何処からか音が。

「アル！」

聞き覚えのある声。

「ま、りい？」

ぐじゅぐじゅの顔をマリーに向けた。

その顔を笑わずにアルに駆け寄るマリー。

「ごめんなさいね、怖かった？」

え？

その言葉は、マリーがアルを探している、否、探していたかのような言動だった。

後ろで、一緒に探していたらしき男が、笑う。

不敵に、笑う。

マリーの髪の毛で、見えない。

涙を拭き、もう一度、見る。

やはり、笑っている。

顔が、見えない。

暗がりです。灯りが、差す。

「
よお
」

休み5（後書き）

強制的に終わらせる。

（ ・ ・ ・ ）

休み6（前書き）

長々しい後書き付き。

休み6

そこにいたのは

そこに、いた、の、h・・・・・・・・・・

ぶつつん。

「ちい、つーまんねえのお」

ぎやはははは、と汚らしく笑う男、がいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・つまえ！」

「あは？なーにさあ？「おまえ」って言えてなあーい」

男としては長い前髪をかきあげて“彼”は言う。

「俺の名前は、バルドⅡエクス。」

「・・・・・・・・・・あ”？」

「おおおつと？そーんなこわあい顔、しないでよねえ？」

ぱちん、と指パツチンフィンガースナップをした。

すると、涙を流してアルを抱いていたマリィがさらさらと砂になり消えた。

「なっ!？」

「怒らないでくれよ？それは、幻覚。分かってるだろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふん」

「素直じゃあないなあ。“子供なんだから”」

「お、俺は子供じゃねえ！」

「説得力ないよ」

につこりと微笑んで言う。

微笑む、という行為に例えていいのか不安な笑み。

かつんかつん、と歩き出す、バルド。

「ああ、そうか。君から何も言わないと思ったたら君は俺と初対面だったかな」

「……何の話だ？」

「はっはー　僕ちん、デビットの」
「だんっ！」

バルドは最後まで言いきれなかった。

アルに押し倒され、床に倒れたから。

正しく言えば、アルに腹を蹴られ、床に倒れた所をのしかかられた、だ。

「デビットを知ってんのかてめえ！！」

「……おっほ　十歳とは、思えねえな」

「っざけんな！言え！吐け！！」

「鬼のような形相って言うの？そーゆーの」

「言えつつってんだろ！！」

「ほざけ」

バルドが一言かけると、アルは“何かに”引っ張られる様に後方へ飛んだ。

「俺の作った世界で自由に動こうとしてんじゃねえよ、餓鬼が」
首を「ごきん、と鳴らせ立ち上がる。」

「……がっはあ」

背中を強打した影響でアルの内蔵なかみの何処かが破裂した。

「ふはっ！俺に逆らうからいけないんだってえ」

また、髪をかきあげる。

長い、黒髪を。

「んー、めんどいしい。　お前が邪魔するからあ　俺、最後まで言わないどくう」

「……んなっ！？」

くっそ、敵相手に「頼む」何て言えねえ・・・

「あはっ　べつつにい頼まれても俺、言うきねえし」

今度は人差し指で毛先をくるくる巻いている。

「あと、俺の“お遊びの時間”^{フリーアクション}の中では俺がさいきよーなワケ」

「・・・・・・はあ？」

修飾語を入れる。

「あ、通じなかった系？要するにい、俺のこの能力の中では、お前は弱くって心の声でも何でもまるわかり！」

「・・・・・・弱くて、は不要だ」

「ふはっ！　強がんなってえ　これだから自分を見えてないって嫌いだぜえ」

びし、とアルを指さす。

「俺と一緒に」

「お前と同じにされたくないな」

「そりゃ、失敬。こっちもだよ」

休み6（後書き）

名前ジェネレーターという最強で最高の仲間を手に入れました。
バルド君もそこで生まれました。

ありがとう！

なかなか良いの出なくて三回ぐらい更新したけどね。
もうこれで考えなくて済む。

（お前、それでも、作者なのか！？）

指パッチンの件について。

弟に名前を聞いたものの

「指パッチン」しか教えてくれず・・・

（使えない弟）

仕方なくWikipediaで調べるとなんとまあこれは。
フィンガースナップと言うのか。格好いいな。

きつと通じないと思ったので、（失礼な）

ルビ形式にさせてもらいました。

戦闘シーンの描写は難しいです。

ついでに、俺、バルドと一緒に頭悪いし。

休み7

「・・・・・・・・・・リーはどこだ」

「あん？」

「・・・・・・・・・・マリーは、マリーは何処だ!？」

小さいながら、普通の大人は平伏す様な睨み。

「ん？あー、彼女か。安心しな。」

「・・・・・・・・・・」

「おつと、睨むなつて。シワが増えちまうぜ?」

とんとん、とバルドは自分の眉間を叩いて見せた。

釣れねえなあ、と笑い、髪を掻き上げる。

そして、横目でアルを見て、

「そんな、彼女が大事なんか?」

と、真剣そうに言う。

「・・・・・・・・・・当たり前だろ。愚問って言うんだよそういうの」

「ふはっ じゃあ、そりゃ、愚問の回答だし、“愚答”だな」

「・・・・・・・・・・あん?」

「俺は聖者と正義がだいっきらいだね。 つつつても 実らない

恋は大好きだよ」

つんつん、とアルの額をつつく。

その手をぱん、と叩き落とすアル。

「どういう意味だ?」

「あは?何でも無いよ。 気にしないほうが身の為、世の為、人の為、否!お前の、為。」

「・・・・・・・・・・?」

くるん、と後ろを向く。

「そろそろ、俺的な時間だ。 じゃあな坊や」

「俺は坊やじゃない」

「一つ忠告しよう」

「？」

「あ^{げんじつ}つちの世界では、お前が失踪したシナリオだ。フォロー頼むぜ？」

ぴた、といきなり止まる。

「俺はこれから、デビットの元に帰る。それに付け加え、俺の能力を教えよう」

「はん」

前髪で、顔が見えない。

口元が、緩む。

笑って、、、、いる？

「俺の、能力は」

「バッド・シナリオ
嘘の台本」

その言葉が発せられた瞬間、^{フリーアクション}お遊びの時間が解除された。
しゅっん、と現実に戻った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・バッド・・・・・・・・シナリオ・・・・・・・・」

と呟く。

「アル！」

ある程度経過すると、後ろからマリーの声が聞こえた。

この、ガレキの中を探したらしく、服も顔もホコリやどろだらけ。

「マリー・・・」

「どうしたのよ！これ！」

「え、ああっ、んっと」

その時、あの、バルドの言葉がよぎった。

“フォロー頼むぜ”

「う、あのね！ちようちよ、そう、ちようちよ！

ちようちよが居たから掴まえようと思って、力発動したら、、、」
マリーは「そう・・・」と嘯うそいた。

俺ってこんな嘘下手だったんだな・・・

マリーは嘯いたわけじゃなく、アルの嘘えんぎを半信半疑で聞いたからであつた。

夜

アルは、湖が見えるテラスで湖の水を操って何か考えていた。

デビットと、バルドは知り合い同士、、、、俺の“元”を知っている、のか。

水はペンギンからイルカ、様々な形になり、小さなショーを開いていた。

幾ら、あの力が強いからと言って、ても足も出なかった。。。。

アルは、ぐしゃあ、と水のイルカ達を握りつぶした。

「強くないと・・・・・・・・・・！」

休み8

「会長！全員無事に集まりました！」

「分かった。まだ用事が残っている。あとで向かう」
ぎい、と椅子を揺らし答えた。

「今日は会長が見れるのね！」

「会長？」

アルがマリーに質問すると、ゴツドがにゅう！と現れた。

（しかも、マリーとアルの間にだ。）

「あれ？あれれ？知らないの？」

ととととととととと。

音を立てるほど強く指でアルの額を突く。

「痛い！止めろ！あほ！」

「ふっふーん。いーの？マリーさんの前だよ？」

「あっ！！！」

ばっ、と上を見るとマリーがいない。

「あははははははっ ひーっ ウケる！その、真剣な表情！嘘です
ーっ！！！！」

涙を流しながらお腹を抱えて笑っている。

実に腹立たしい。

またも、額を突く。

多少爪が伸びているため内心痛い。

それを無表情で受け入れて（？）いるアルも偉い。

「そんなあなたに良い情報を持ち寄りましたあ！」

両手を大きく広げ万歳のポーズ。

アルは俺よりガキなんじゃね？と思うほど子供っぽい仕草だった。

湖付近

「運動ついでに抜けてきたけどよあ」

「「用事つてなに？」」

はもる。

「え？ あはっうーんとねえ」

「さっさと言え。」

「ちえー 釣れないなあ。どーせ暇なクセに」

「うっさい！」

ゴツドは自分の胸の前でぱん、と手を合わせた。

その手を開くと、本（の様な物）が出てきた。

「怪人連盟本部からの、連絡があつたんです。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

くそ！

アルが全力で走っていた。

『本部からの連絡の内容をざっくり言つと』

俺は、助けられてばかりだな！

『マリーさんが、さらわれます』

ざざざざ、と勢い良くマリーの部屋の前に着いた。

そこにいたのは、ゴツド。

「どうやら、遅かったようです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ！」

走り出すアルに向けてゴツドは言った。

「まって！無駄にうごいちゃだめ！」

「はあ！？じゃあ、待ってるって言つのか！？マリーが、死ぬかも

知れないんだぞ！？」

「そんなに、試験大事ですか！？」

「んなわけねえだろ！？マリーの命だよ！」

「じゃあ、待ってて下さい」

ゴツドはアルに手を向け、緑色の何かを放った。

「が、う、うごか、な」

「麻痺してる筈ですから、動かないでくださいね。まあ、動けま・
・・・・、！？」

ゴツドはもう一度アルに目を戻すとアルが、いない。

「嘘でしょ！？成人でも三日は動けない筈なのに！」

急いで部屋を出て、左右を見ても、誰もいない。

あの状態で走ったって言うの！？

ゴツドは、「チッ」と舌打ちして、床に両手をおいた。

「はあ、はあ、はあ」

体が麻痺している。

感覚を蝕む。

すると、足元から何故か草木が生え、

アルの行く手を拒み、更にはアルの足に絡み取れなくなった。

「だから、動かないでって言ったの。強制って嫌いだから」

後ろからゴツドが悠々と歩いてきた。

「これも、お前のしわ・・・ざ・・・・・」

がくん、と意識が遠のき、倒れる。

「やっと、麻酔も聞いたんだね。まったく。」

ふう、と落胆した。

休み9

はっ、と顔をあげ、目を覚ますとそこは病室。

「お、俺」

「俺？」

そこにはマリーも、いた。

「ふわあ!？」

ベッドの上をざざ、と後退し壁にゴン!と打った。

「いひゃい！」

その拍子に舌も嚙んだらしい。

ご愁傷さまだ。

「どうしたの？」

廊下にはゴッドがニヤついていた。

「……………何でもないよ」

「そう。あ、あたし、ウィンドに呼ばれてるから行くね」

「へえ!？」

「実らない恋」

ゴッドがニヤつきつついう。
ぼそと。

「お前っ!！」

ゴッドが顔に手をやり、その手を振った。

すると、彼女の顔が手があごから頭に掛けて振った瞬間
顔はバルドに変化した。

「ひゃはは 久しぶり。 一日ぶりだけど」

「な、何しに来たっ!」

マリーは、居ない。

「えー？きつついなあ、遊びに来たんだよ」

「余計なんだよ、それが」

「ははっ 大丈夫、“今回は”何もしない予定だから」

「！？」

「“この前”はデビットからの命令だしね。逆らえないよ。悪は絶対だからね」

「……悪は強えとは限らねえ」

デビットはクスツと笑い、そっぽを向く。

それを、キツイ目で睨むアル。

「睨むなよ。」

一言言い、もう一度アルと目を合わせた。

「これは、俺の単独行動だって言っただろ？」

「そうは、聞いてないが？」

「そういうニュアンスでは言っていないね」

につこり、と微笑む。

「まあ、怒るなよ」

髪を掻き上げ言う。

流石に邪魔だったのか、後ろの髪だけ縛った。

ちょこん、と小さくまとめてあった。

「俺はお前側でも、あいつら側でもねえからな」

ひひひ、と笑いつつ。

「どういう？」

「一人が好きなんだよ。ただどなあ」

空を見、言う。

「デビットには、魅かれちゃう。」

「……」

「おいおい、黙るなよ」

つんつん、と額をつつく。

大分、バルドの独り言に付き合い、時間が過ぎた。

「チッ もうこんな時間かよ」

「あん？あー、あの時計、止まってるぜ？」

「はあ！？」

「だって、ここ、俺の世界の中だし」

俺の世界の、中。

フリーアクション

“お遊びの時間”

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・いつの間に入れたんだよ」

バルド曰く、マリーが出て行った後、らしい。

準備いいな、とアルは不覚にも関心してしまった。

「で？ 用事済んだんだろ？さっさと帰れよ」

「うわっ ひっどーいつ。 つつてもー今帰れねえんだよなあ」

「なんで？」

「ルナエラちゃんに意地悪しちゃってさあ」

怒っていて、防備を強化し、“バルドだけ”入れないらしい。

「悲惨、つつーか、自業自得じゃね？」

「ごもつともだな」

引きつった表情で言った。

帰る間に、バルドが言った一言をアルは思い出していた。

デビット

「奴の力は“闇使い。”」

ダーク・マスター

「ダーク、、、？」

「そう。文字通り、闇を使う。気をつけろよ。そこらへんで最強とか謳うたわれ、

調子に乗ってるんじゃないか？ それが足を掬う。」

「何が言いたんだよ？」

「ん？ 言ってるのか？」

『言え!』

『お前は、弱い』

こんなやり取りをし、アルは確信した。
ある 確信を。

開会式（前書き）

あとがき付き。

開会式

「ねえ、ゴツドちゃん。アル、知らない？」

「さあ？知らないですけど・・・。」

「そう。ごめんなさいね。ありがと。見つけたら教えて頂戴ね」

「分かりましたあ」

びしつと、敬礼。

そんな頃。

アルは、北海道に居た。

残りの六日を使つて、（お金は持つて無いので）

力を使つて頑張つてここまで辿りついたのである。

「全く。各地を点々とするのは、やめてほしいな」

はあ、とため息まじりに愚痴を零す。

着いた先は、大きな大きな豪邸。

「各国、各県、各地に別荘持つとか、今の世の中に喧嘩売ってるよなあ」

独り言。

ハゲるよ。アルくん。

コンコン、とノックではなく、インターホン。

そのインターホンを、ぴんぽーん、と押す。

すると、『はい？』と男の人らしき人物から返答が来た。

「あ！僕ですつアルです！」

『ああ、アル様ですか。お懐かしいですね。今開けます。』

暫くも経たずにドアが開いた。

「お嬢様はお部屋にいらっしゃいます。場所は、分かりますよね？」

「ああ、はい。ご心配なく。じゃ、失礼します」

アルが、入ると外を気にするかのようになり、さつさとドアを閉めた。

二階の三分の二を使う程、大きな部屋。

そこに、アルのお目当ての人がいた。

「美子さん。」

「あ” あん？」

ファンシーで、姫力ワなベッドから、女の子ではないような、声が聞こえた。

「あーっ アルかあ？おつきくな」

ちつまーんとした、アルを見て・・・

「ごめん、前言撤回。ちつさくなったな」

「うっさいっ！」

「まあ、いいか。で？妾^{あたし}に用があるんでしょ？」

「強くなりたいい？」

「はい。」

「率直に言っけどさあ、何で、妾^{あたし}なわけ？」

「一番強そうだったから」

「死ねや」

はあ、とため息を混ぜがちに、ベッドから起き上がる。

ピンクのパジャマ。

くまさん柄。

「意外と可愛らしいの着てるんですね」

「部屋が部屋だからね」

周りは真ッピンクの世界。

クッションとか、ぬいぐるみとかまで置いてある。

「妾^{あたし}の趣味じゃないからね？」

ギロリとアルを睨む。

そうそう。彼らの雑談中に彼女の紹介をしようか。
名前は、“戸梶^{とかじ} 美子^{みこ}” と言う“く使い”の能力を全て使える謎の人物。

アルでさえも、敬語を使う、妙な相手。

「さて。じゃ、行こうかな」

パチン、と指^{フィンガー}パツチン^{スナップ}をすると・・・・・・・・・・

美子の服装が一変。

ピンクとはイメージ真逆の真っ黒に。

黒のカーディガンに、黒の短めのスカート。

黒い眺めのニーハイ。所謂、制服だ。

流石にシャツだけは、白だった。そして、黒いネクタイ。

とどめに、黒いスクールバッグ。

「下^{執事}らには、休暇を与えた。長くなるんでしょ？」

アルは静かにこくと頷く。

開会式（後書き）

美子ちゃん、登場！

初めての日本人ですねっ！

美子ちゃんも、ジェネレーターで生まれちゃいました。
今回は一発変換だったおっ！！

開会式2

東京

「もう、アルってばあつ　もう直ぐ開会式始まつちやうじゃないっ」
「まあ、いなくつても大丈夫なんだけどさあ」、としょんぼり呟く。

北海道

豪邸の外に出たふたりは、話し合っていた。

「何処でやるの？」

「えーつと、まあ、付いてきてください」

「ふーん。まあいいや。」

美子は、胸の前で手を合わせ、その手を横に引いた。

すると、その手の中から、真つ黒な傘が現れた。

「何分、なにぶん歩くの嫌いでねえ。」

と言つて、雪の上にその傘を落とした。

重力があるので、そのまま地面に落ち、雪と混ざり合う筈なのだが

その傘は、重力に逆らい、浮いているのである。

ふぉんふぉん、と浮く傘を見て、大きく口を開けているアルに向けて、

「アホか、お前はっ！」

と一喝。

そして、その傘に乗り、

「行くぞ。　うん？何をぼーとしておるっ！行くといってるのだっ」

ばんばん、と動かないアルの頭を叩いた。

「分かりました。」

「なっ、それを早く言えっ」

「え？ 東京が開会式場だって言っても知ってるかどうか、心配で」

「阿呆っ！！東京は首都だぞ！？アメリカ人が、ワシントンを忘れるのと一緒にじゃっ」

また、叩く。

「それは、忘れないッスねえ」

「同じなのにつ！！！」

「それなら早く言えばいいのに。ここから、東京までだと、結構遠いんだよ？」

「はあ………」

「いいよ、無関心は、無関心のままで。妾^{あたし}も、あんたの力育てるの無関心だし。」

「………」

と言いつつ、目の前を指差した。

「いい？妾^{あたし}が異次元突破空間を作る。そのまま、突っ走れよ？止まったら殺す」

「はい」

マジで殺されそう………

「出来たっ！走れっ！！！」

ピンポンパンポン。

『あと、五分程で、開会式を行います。』

「アルっ」

ばんっ、と扉が開いた。

「えっ!？」

ひんやりとした冬風とともに、二人が。

「た、ただいまっ」

「ん?デリーター、、、試験??」

美子は、傘に乗ったまま会場に入ってきた。

「こ、困ります!部外者が入るなんて」

「なーにを言ってる?この顔をよく見れっ」

「あっ」

リリユエルが美子を見た途端、怯え始めた。

「ふあ、、、ひ、、、」

がちがち、と会場内は暖かいのに、震えている。

「お、リリユか? あたし妾だっ」

傘に乗ったまま、リリユエルに抱きついた。

「い、今はリリユエルとお、お呼びくださいっ!

しゅ、主催者様にお会いになられては、どとどとですかっ!？」

「そうじゃのっ 案内頼めるかえっ!？」

妙にテンション高い。

「あの。」

案内役をマリーに押し付けたリリユエルは、たったか自分の部屋へ帰った。

「ん?」

「あなた、戸梶さんですか?」

「そうだよ。……………ところで、君は刃物カトラリーは好きかな?」

「カトラリー?ああ、ナイフですか?」

「ん。そうとも言つかもね。まあ、総称で。」

「好きです けど」

「そうかつ」

にぱっ、と笑顔を傾ける。

「やあ、久しぶり。美子。相変わらず、若いね」

マリーを大ホールへ歸し、一人主催者室に。

「見た目だけ、でしょ。かくいう貴方もよ。」
で？、と切り返す。

「何の用って事かしら？ そりゃあ、勿論。」

「何故、十年経っていない今、開催したのか。」
「」

開会式3

ボンボンボン、とマイクの調整しているのが分かる様な音が響く。

「よし、、、マイク大丈夫つとお」

すると。ステージの袖から、ある男の人が現れた。

そして、彼は、アニエルからマイクを取り、こういう。

『よく集まったな。私はこの試験の主催者だ。』

その、見た目こそは多少若そうな男は言う。

年齢的には三十代後半だろう。

その言葉に、会場は静まる。

あれが・・・・・・主催者？

アルが半信半疑に話を聞く。

「ねえ、アル。あの人、吉廣よしひろエンって言うの。」

「あの人が！？」

“裏社会”では有名ならしい。

美子は、まだ、傘に乗ったまま。

そして険しい表情。

さらに腕くみ。

エンと話してからずっとこの状態だ。

『君たち挑戦者には、一つ、謝らなければならないのだ』

美子は、その言葉に、「来たっ」と言わんばかりに顔をあげた。
そして。

魔法で瞬間移動してしまった。

美子さん、何かつかんだのかな？

美子を見ていたアルまで険しい表情になってしまった。

「どしたの？アル？」

「えっ！？何でも無いよ。」

手を横に振り、否定。

『この試験は、嘘だ』

ざわ。

ざわつく会場。

『その代わり、任務を依頼したいのだ』

次のこの一言でざわつきは収まった。

『そこら辺の野次馬に挑戦されては困る内容だからな』

「と、いうことは重要な任務なのよね」

ステージの脇から、腕くみをしている、美子が。

「やあ、美子。良く分かったね」

美子とエンがにつこりとほえみ会話。

「おい、あれみろよ!」「ああ、“く使い”の創世者だろ!?!」

「あー、静かに、静かにいつ。野次馬さんは黙ってて。殺すよ?」

その言葉は微笑んで言われたのである。

「全く。妾^{あたし}より、年下の癖に、妾^{あたし}より生意気なやり方するなんて」

「そりゃ、どうも」

頭を掻いて照れくさそうに笑う。

「おい!お前から楽しくお喋り中に悪いんだけどよおっ!任務の内

容ってなんだよ」

「ああ、すまないね。デビットという男の排除だ」

マイクを使わず言った言葉は、そこにいた皆に伝わった。

コンコン、とアルの部屋のドアがノックされる。

開けるとそこには、美子が居た。

「デビットについて良いかな?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうぞ」

「あのこは、妾^{あたし}の闇を奪った。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・闇」

「そう。勿論！今も、妾^{あたし}は闇使えるよ？」

「ただ、と続ける。」

「あの子は、“出来過ぎていた”」

「？ どういう？」

「悪い意味よ？ だから」

「ぎゅう、とアルの手を握る。」

「あの子を、幸^{助けて}せにしてほしいの」

「美子さん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その会話の一部を、マリーは廊下で聞いていた。
手には、バスケット。

クッキーが入っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・アル・・・・・・・・」

その顔は何処か哀し気だった。

マリーはバスケットをどさ、と落とし、今にも泣きそうな顔で走っていった。

搜索（前書き）

回想から入ります。

差別批判偽善者論（後書き）付き。

搜索

『ああ、美子さん』

『ん？』

『一つ、折り入ってお聞きしたいことがあるんです』

『何さ？ 改まっちゃって』

アルは多少目を泳がせて聞いた。

『あの、何故、あのとき、マリーとコリッタが会場にいなかったのか』

『愚問だね。妾^{あたし}が知るわけ あるけどお！？』

『怖いです』

『いーかあ？聞いたからにはよく聞けよ』

耳の穴かっぱじってでもな！、と脅す。

『あいつらは、主催者の思惑^{依頼の件}が分かってたんだ』

『は！？』

あんぐりと、口を大きく開けるアル。

『マリーは推理力がいい。コリッタは愚答だが、長年のベテラン。』

『確かに 成立する』

『分かっていたから、口止めを、された』

これで、一つのなぞが解けた。

アルは東京中を探しながら考える。

美子の情報によると、ここにいるらしいので。

マリーとは、別行動。

珍しく、マリーから 断った。

「まあ、そんなことは、置いてこう」

険しい表情を晴らし、前を向きあるきだした。

その頃、東京タワーの中心部。

の、外。

そこに、美子は居た。

展望台の（外の）上に乗し、ハンバーガーを摂取中。

「うーん。さすがに百メートル以上の眺めはさいっこーだねえ」
足をぶらぶらさせながら。

勿論、落ちたら即死である。

「ごちそーさまっ あー、不味^{まず}かった」

パンツ、と両手を合わせ、合掌。

「いやあ、これを上手いとか言う若者がはかりしれないねえ」
げえっぶ、とガスを漏らす。

それを、誰もいないのに「おっと」と口を抑えた。

「んー。 うかつに動けないなあ。 そこら辺には試験者がわんさか・
・・・・、さて」

すくつと、立ち上がり辺りを見る。

「ん？おー。 よしっ」

と独り言。

本当に多い。

そして。

そのまま
落下した。

タワー下

わいわいがやがやと賑わっている。

そこに。

上から。

人が。

地面ギリギリの時、突然傘が現れた。

「ん」

と。

それを乗り直す。

「じゃあね。偏見味覚の若人っ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

傘に乗った不気味な少女は風のように去っていった。

ぎゅんぎゅん人と人を横切り、建物をすり抜け、人を探す。

「ふうんふんふーん。最近の若者はこれだからいけないのよん」
などといい。

そして、ある程度飛ぶと止まった。

「あり？見失ったい」

頭を掻き周りを見る。

日本人ばかり。

「ん。」

仕方なく傘から下りた。

「外国人？見てないねえ」

「そうですか・・・・・・・・。ありがとうございます」

につこりと微笑んで、その質問者と別れた。

「見つからないなあ」

搜索（後書き）

外人と呼んではいけないのを知ってますか？
差別なんですよ。

外人とは、外の人。他の人。
あなたも、「外人」などと呼ばれては困りますよね。
何もしてないのに。“そとのひと”ですよ？
地球は一つだっつーの。

外国の人なんだから。
ちゃんと呼んであげてね。

搜索2（前書き）

気力のせいか、短めです

搜索 2

「まっはくう。おなかへるっふえ」

むぐむぐ、と定食屋のメニューを読みながら食べる。

「お客さん、そんな食べてくれるのは嬉しいけど、お金あるの？君学生でしょ」

「うるひゃいなあ。あひゃひをしらんのお？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もういーよ」

ゴックンと飲み干す。

「出てけって言うんでしょ？はい、お金え。お釣り要らないよー。」
どさつと置いたのは、二十万。

「えええええええっ！？」

「あり？足りない？」

「いやっ。お金持ちすぎでしょ！」

「ん？そかあ？おいしいところにゃあ、ちゃんと出さないかね」
につこりと微笑む。

「あ！」

そして、店主は何かを思いついたように言った。

「貴方、美子様でしたかつ！」

「うん。」

ずぞぞぞぞぞぞ、とジュースを底まで飲む。

「来店ありがとうございます。」

ぺっこり90度。

「んーん。じゃーね。またくるよ」

「はっはい！」

「どーやら、妾の知名度もまんざらでは無い様子。」
ニヤニヤしながら歩きだす。

相当嬉しいらしい。

「その高校生！」

「ほあ？」

振り向くと　人質になっていた。

「んー？」

首にはナイフを突き立てられていた。

刃の反対側だが、痛いものは痛い。

「なーにすんのさあ。神様に土下座　しなっつっ！！」

ナイフを突き立てた男のみぞをひじで殴り、瞬時にしゃがみ、腕から抜ける。

そして、男の手からナイフを蹴りで奪う。

「妾^{あたし}にたてつくたあ、とんだ命知らずだねっ！」

びしい、と指を差したが良いものの。

男は気絶をしている。

「ありやあ。やりすぎた」

ぽりぽりと、頬を掻き、苦笑い。

「あ、けーさつくん。始末お願いね」

「待ってくださいっ！署まで一緒に来て頂けませ」

美子の顔を見た途端止まる。

「し、失礼しましたあっ！　後でご自宅にお向かいしますう！！！！」

「向かつて誰もいないよ。あー、けーさつくん。

外国人を見つけたら妾^{あたし}に連絡するように他のけーさつくんにも言うてくれないかなあ？」

「了解しました！」

びしつと敬礼。

「なんか気分いいー」

本当に気分がいいらしく、鼻歌を歌いながら歩きだした。

搜索3

「あ、はっけーん」

びーっと、一人の女性を指差し言う少女。

彼女は少女という年齢では無いのだが。

彼女の名前は、戸梶^{とがじ} 美子^{みこ}。

“く使い”の創世者。

「マリーちゃん！」

叫ぶ。

「！．．．．．美子さん」

マリーはまだ、あの勘違いを背負っていた。

「？ どしたの不機嫌ねえ」

まあそのカフェでお茶でもしよう、と誘う。

仕方なくマリーもそれに応じる。

「アルに振られた？」

クスクス笑いながら言う。

「な、そんなわけっ！」

「あつは。あー、あのときの話聞き違えてるでしょ。あのバスケット、マリーちゃんのよね」

アイスコーヒーが入ったグラスのストローを回し、カラカラ言わせる。

「．．．．．」

「まあ、別に答えろとは言わないけどさあ」
「ずず、とコーヒーを飲む。」

「美味しいな．．．．．だつて。マリーちゃんのリン
スの匂いがついてたし」

「リンス、ですか？」

「うん。それ、なんだろう．．．．．、薔薇の匂いかな？ いい匂い

だよね」

微笑んだ。

「まあ、それだけじゃ推理浅いね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あのとき小さく一言言っただでしょ？」「アル」って「！？」

き、聞こえた訳！？

「聞こえたよ。」

マリーの“心の声に答えるように言った”

「伊達にながあく生きて無いからね」

そこで、店員さんにスイーツを頼んだ。

「マリーちゃんも頼んで良いよ」

はい、とメニューを渡された。

渋々受け取り選び始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・私の勘違いだったんですか」

「みたいだね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめんなさいっ！」

「だいじょーぶ、怒ってないし。さ、スイーツも来たしさ。」

来た量が半端ない。

全品＋マリーの頼んだワッフル

ワッフルだけ二つ。

「ありがとねー」

やあやあ、と店員に手を陽気に振った。

「じゃ、いっただっきまーす」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、ご馳走様でしたっ」

完食である。

しかも、マリーのワッフルと同着。

「あ、ありえないっ！」

「それが妾^{あたし}だから」
にっこり。

「あの、最後に一つ折り入ってお願いがあるんです」
真剣な表情で、マリーは言う。

「ん？妾^{あたし}に出来るなら何でも言ってよ」

今度はオレンジジュースを飲みながら言う。

「私を鍛えて下さいっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふあ？」

搜索 4

「私を鍛えて下さいっ！」

「き、鍛えるって……」

「やはり、ダメなんですか？」

「そういう意味じゃないですっ！」

てんぱって敬語になってしまった。

そしてひと呼吸置いて、

「詳しく教えてくれないかな？」

と。

「成程。」

「……」

「要するに、アルの足を最近引っ張っている様に感じて」

「はい」

「自分も、ちゃんと出来る様になりたかった」

「はいっ！」

「そう。分かった。」

嬉しそうにマリーが顔を上げる。

「だけど」

「……」

「貴方の決意が見たい」

びしっ、とマリーの目の前に人差し指を差した。

「決意」

美子は、かちやり、とマリー分のお金を置き帰った。

「あの子にはまだ早すぎる」

そんな頃

どどおーんっ！！

「！」

アルが後ろを向くとそこでは

銀行強盗が行われていた。

強盗と言うより、テロに近い域だった。

中からは多数の悲鳴が聞こえた。

「た、助けなきゃっ！」

銀行の近くでは、警察が説得に入っていた。

「僕を入れて下さいっ！」

と、言ったところで。

アルの見た目は小学生。

入れてくれる訳が無い。

「だーめだめ。あの場所キミみたいな子がいるんだよ！？怖い思い嫌だろ！？」

「いいから、入れて下さいっ！」

ナチュラル
自然の力でその警官を押し入れ入る。

「き、君っ！！！」

ガラスが飛び散り割れている。

その上をパキパキと歩く。

「動くなガキ」

すると、一人の男に銃口を向けられた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アルは睨みつつも両手を上げ、従った。

外では

「ありゃ？何が起きたのけーさつくんと。」

ぴつたりと言つて良い程、のタイミングで美子が。

「美子様っ!？」

「やほあ」

びしつと遊び半分で敬礼。

「どつたの？あ、強盗かあ？　ん？この感じ」

「どうかなさりましたか？」

「白髪のふわふわっ子来たでしょ」

「あー、さっきの小学生ですかね？」

やっぱりいたのかあ、と。

言う。

「お知り合いで？」

「ん？弟子みたいなもんだよ。　あ、通してね。すまんね」

おっさんみたいに、謝りながら通る。

「きゃあああああああああつ」

悲鳴が。

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ」

流石の美子も焦る。

「いいから早く通せっ!!」

人波を押しよけつつ言う。

「早くっ！邪魔だっ！クソっ!!」

焦り、焦る。

パァン。

銃声が聞こえた。

搜索5

「がふつ」

アルの心臓の位置。びつたり、銃弾が刺さる。

[illegible]

「美、子さ、」

そして、美子の方へ向き微笑んだ。
どさっ、と床に倒れ込んだ。

「アルっ！アルっ！！！！」

アルに駆け寄り声をかけるが反応がない。

幸い、心臓音だけはした。

九死に一生を得たらしい。

「てめええええええええええ」

茶色の混じったナチュラルな黒の髪は、怒りによって白く染ま

ギロりと睨む。

「美子さんっ！」

その場にマリーも駆けつけたらしい。

「^{ひと}人間の分際で我等に逆らいよってっ!!!!!!!!!!」

美子周辺が渦巻き、砂埃が立つ。

「ぶつ殺す」

どうしよう！理性を失ってる！

「あの、私もここにに入れて下さい」

「入るな!!!」

びく、と美子の怒号に驚くマリィ。

「ど、どうしてですか！？私も、私も戦わせてください！」

「黙れっ！！！！」

その威圧で残りのガラスが吹き飛ぶ。

だが、そのガラスは吹き飛んだのはいいがある処定置から動かない。
そして美子は両手を広げた。

「意味がわかるか犯罪者ども。」

「ああ？」

強盗は美子に拳銃を向けたままだ。

「貴様らはここから生きて帰れないと思え。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・っざっけんなっ！」

チャキツ！と引き金を引いた。

「ほう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！？」

なんだこの殺気！こいつ・・・・・・・・人間かよ！？

美子は両手を下ろした。

「謝罪の一言も無いのか。おい、警察供」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こいつら、殺すぞ」

「お好きにどうぞ」

「ちょ、何言ってるんですか！？それでも民主警察ですか！？」

「美子さんが怒ったら私も太刀打ち出来ないんだよ。」

地球の半分は壊せるかもしれないからね」

マリーはその一言に目を見開いた。

あの女の子が。

この、大きな地球を。

美子は手を振り下ろし、ガラスを犯人にありったけぶつけた。

「骨も残さないであげる」

ニヤリと不敵に微笑んだ。

「な、一片も当たってないじゃない!?」

犯人にはガラスの一片も当たってやしなかった。

犯人のギリギリでそのガラスは止まっていた。

「ひい……………」

とビビリ、拳銃などの武器をおろした。

「アル……………あなたでしょ」

倒れているアルに美子は話しかける。

「どうして止めたの!？」

アルは体をぐぐ、と起こした。

「美子さんに、人は殺して欲しくないから」

壁にもたれてそう言った。

「……………アル……………」

その一言に美子の髪色はいつもの色に戻った。

「何をほざいておるのじゃ。妾^{あたし}はもう、過去に百人は殺しておる」

と、笑顔で答えた。

「美子さんそれ、笑顔で言っている内容じゃないですね」

搜索 6

美子は、アルの身体を起こし傷を塞いだ。

「けーさつくん……、この子を病院に」

アルからも、警察からも目を離し、

表情が見えなくなった。

「了解致しました」

警察は有無も言わず承知した。

「美子さん……」

「ごめん。暫く一人にさせてくれないかな」

「え？ああ……はい」

何が悪かったんだろう、と気になり、

銀行から出る一步前にもう一度美子の方を向くと

何か、“涙を拭う”動作をしていた。

次の日その銀行は何もなかったかのように元通りになっていた。

「ここであつたんでしょ？」「らしいね」

と新聞を持った色んな人がピカピカの銀行を見て変な目で見ていた。
するとそこに。

「散れっ！ガキがつー！」

と怒号が。

見ると美子さんがいるではないか。

「美子さん」

「あー、あんたも野次馬か？」

「ち、違いますって」

両手を振り、否定するマリーに対して美子はふっ、と笑っただけだった。

「あんたを鍛え上げる件、了承しなくてもいいよ」

いきなり美子が言い出すもので、マリーはほうけた顔をした。

余りにもあんぐりと大口を開けてしまったので

マリーはとっさに口を抑えた。

「ふふっ　今は気分が悪いからね、あんたにあげよっかな、って。」

「ふ、普通逆じゃあないですか？」

まあね、と微笑んだ。

「ああ、それと。」

これまた微笑んで。

（不機嫌なときは表情や表現は上機嫌らしい。紛らわしい人だ）

「貴方の、大切なものを頂かせてもらいますね」

突然敬語。

その笑顔と敬語が怖かった。

「やっぱり、考えさせてくださいっ！」

その恐さ故にそのばを断ってしまった。

好機だったのに……

マリーはオロオロしつつもその場から走り去った。

搜索 7

次の日、美子は東京の別荘に居た。
すると朝早く。

マリーから一本の電話。

「あー、、、、、ええ!？」

出る前に驚く。

「嘘でしょ!？^{あたし}妾の携帯電話には誰にも通話できない状態なのにつ
！」

まあいいか、と気を取り直し出る。

内容は昨日の続きだった。

「で？」

「は、はいっ!あの、鍛えて下さい」

「鍛える、か」

ふう、と遠目で落胆。

「あんたさあ、“く使い”って、欲しくない訳？」

「・・・・・・、アルとか持つてるあれですよ」

「よくわかってんじゃないん」

にしし、と笑む。

「得に欲しく無いですね。 自分の特化って、ないし」

「はあ?なァーに言ってるのっ!最初会ったとき、^{あたし}妾言っただでしょ
!？」

「最・・・・・・初？」

『^{カトラリー}君は、刃物は好きかな?』

「・・・・・・・・・・・・・・・・、あつ！」

「わかったかなあ？」

「刃物、カトラリーっ！」

又も微笑む。

「ほ、欲しいっ！欲しいです！というか、あるんですか？
カトラリー・マスター刃物使
い”」

「ほざいてんじゃないわよ。この世にある物すべてに適応してるのがこれらなんだから。」

「そ、それで。代償って？」

「ああ、あなたの知識をコピーするだけ」
「知識？」

あまりのものに首をかしげる。

命とか、もっと重要なものかと思ってたのに・・・・・・・・
「ほら、妾^{あたし}これでも今年で200歳チョイだからさ。若者の知識入れないとアレなんだよ」

マスター創世者の“最低寿命”が500歳だと知ってたけど・・・・・・・・、
改めると凄い。

「じゃ、準備っつか、心の準備？ができたら呼んでちょーだい」

それに十分時代についていけると思うんだけどなあ。

「あー、だいじょーぶ。知識なくてもついてけるよ」

「え？」

「あなたの知識だけが欲しい」

「私の、だけ？」

ほうけるマリー。

それに対しニツと微笑み返す（よく笑うひとだ）。

「あなたは長年、有名な盗賊、海賊をこなしてきた。

その、常人より発達した、至高で最高な脳が、能力が欲しいの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

刃物使いの移植も終わった頃。

美子は昏睡状態のマリーを抱え、自室にあるベッドへ向かっていた。

「こんな子が、こんな若い子が。盗賊をやる程、世界は廃れているかね」

ふうう、とため息混ざりの独り言。

いくら、見た目は若くてもやはり年寄り、年寄りらしい。

「しかも、この子に至っては異常。元々の家計がお金持ちの筈。」

はああ、と又もため息。

ベッドにおろした所でマリーが起きていたのを気づいた。

「最初から起きてました」

いつから起きていたのか、という質問が想定できたのだろう。

「何でも知ってるんですね。まさか」

「あ、さっき記憶もとったとか、思った！？違う！断じて！

………まあ信じてもいいんだけど。」

反逆は慣れてるよ、とどこか寂しそうな目。

「あの」

「？」

「アルの事、教えてください」

搜索8（前書き）

45話にして、主人公の実態が ！？
この話全てにまとめられるか、が問題。
皆様読んでくれて有難う。

搜索 8

「アルについて？いいよ？」

あっさり。

「ほ、本当ですか！？」

「それに足して、約束。 本人には言ってもいいけどね、

今ここで妾あたしが話すコト全て信じて。それと。

驚いたらダメね」

「は、はい」

「よろしい！・・・・・・・・・・どこから話せばいいかな。んー、
そうだ」

十年前

あいつが最初^{アル}にやって来たのはそれぐらい。

彼からはとるものが無かった。

一番良いとしても 身体能力かな。

それを妾あたしは貰った。

「チッ。俺のは消えねえよな」

「なあにバカげたこと言うのさ。当たり前。

だって、“コピー”だもん。意味わかるかい？お坊ちゃん」

「黙れクソババア。」

ゴッ

「口は災いの元。」

彼は、「鍛えるため」と言い張って、妾あたしの家に毎日来たわ。

「またきたの？懲りないね。そろそろ警察呼ぶよ」

「はん。知らねえし。」
「頑固だなあ。」

ある日、家で泊まったことがあってね。

ちよつとチエックとか言つて、心を覗いたの。

そしたら、『イル』がいた。

とっさだったから、封じちゃった。

どうしても、あの子は好けなかったの。

なんか、こつ。心にぽっかり穴が開いてて。

吸い込まれちゃう感じ。

無、って言うのかな。怖かった。

あの子、アルは。

ほんの10日で、“ナチュラル”をマスターした。

最後にこれだけ教えないとね。

あの子の名前と、何故幼少になっているのか。

幼少になっている理由。

簡単よ。

アルが追っている“デビット”に闇の力で本体を支配されているから。

支配って言つか、、束縛かな。

そして、名前。

彼の本当の名前は　アルエム・D・ペイズリー。

搜索9（前書き）

あつさりアルの過去とか
書いちゃって良いんですかねえ

搜索 9

マリーは苦悩していた。

アルの本性を知らされ。

今後、どう接すれば良いのか。

どう、対処すればいいのか。

まさか、アルにあんな過去があったなんて。

美子の屋敷の中の客間で床を見つつ苦悩。

「マリー様。お疲れでしょう。紅茶しか出せませんが。」

と、メイドの魚谷あいりさん。

「あ、有難う御座います、、、、、、、」

「大変ですね、お若いのに皆様色々な試練がありまして。」

他人事の様に、流す様に言う。

につこりと微笑みつつ。

「え、ええ。……………そういうあいりさんはいくつな

んですか？」

「まあっ。いくら同性でも年を聞くのはNGですよ。教えちゃい

ますけど」

うふふ、と可愛らしく微笑んだ。

「実は私、今年で百になります」

容姿はまったくの20代だった。

美子は注意深く街中を散策していた。

気配は感じる。妾あかしの後ろにいる。

その人物を確認するため、いきなりビル街から、裏路地へ入る。

美子が袋のねずみになったところで、後ろを向く。
すると

そこに立っていたのはいたって普通の青年。
年齢的に18前後であろっ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あっ」

何か言いかけた。

「ん？・・・・・・・・・・・・・・・・、まあいい。あたし妾を尾行したから
にはついてきてもらうよん」

がしい、と腕をつかみとんと跳躍。

するとまたたく間にビルより上になった。

「うわあああああああああああああっ」

「これぐらいで驚くなっ！」

ばんっ！

と勢い良く屋敷のドアが開く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・アル！」

そこにいたのは、アル。

「まああ、アルさん。お茶でもいかがですか？」

ニコニコと満面の笑みをアルに向けるあいり。

「すいません。今は結構です」

真剣な表情でかく断った。

あいりはが、しゅーん、として「そうですか」と答えそのばをあとにした。

「ま、マリー！美子さんから聞いたって本当！？」

「もう、ぶらなくていいよ。全部、、、教えてもらった」

「う、嘘だろ！？」

がくん、と膝から落ちる。

「こんなに、ぶるなんて、何があるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、まあ、いっかつ」

にぱっ、といつもの子供染みた笑顔を見せた。

やっぱりこれが、一番だなあ
ふっ、と笑みを零す。

そんなとき。

ばーん、と荒々しくドアが開けられた。

（荒々しすぎる所為で壊れた）

「あいりっ！部屋空いてる！？」

美子だった。

搜索10

青年を部屋に運び、先生医師が来るのを待った。

「あの人って？」

「さつき拾った。記憶無いらしいからさ、連れてきた」

「なんでわかるんですか!？」

「あたし妾を誰だと思ってるの」

キツ、と睨む美子。

「それにしてもねえ、どつかで見た顔立ちなんだよねえ」

ううーん、と考える美子。

だが、何だったかねえ、と諦める。

「何年も生きてると記憶が途切れ途切れでキツイんだよねえ」

「大変ですね」

「あ、マリー！他人事？つーかさあ、アルに言ったの？力のこと。」

「喋ってないです。」

「機会ないしね」

あはっ、と話を振った美子が言った。

「まあ、追い追い話してあげな」

「は、はい!」

やっぱり、美子は優しいのである。

「・・・・・・・・ん」

「あ、起きましたか？」

「あああああっ!？」

青年は、過剰驚き、ベッドから落ちた。

「だ、大丈夫ですか!？」

とあいりが確認。

大丈夫そうだ。

「あの、貴方が寝ている間、頭の中を見させて頂きました。記憶を失ってらっしゃるんですね。」

「ぼ、僕が記憶喪失！？・・・・・・・・・・・・・・・・、僕の、名前
はなんだ！？」

「残念ですが、現代医学の力ではそこまで入り込めません。」

「あ。」

と美子は窓に指をやる。

青く綺麗な鳥がいた。

あの、青年の髪色と同じ綺麗な青色の。

「思い出した！あいつの、身元！！」

そう、言つて。

青年とメイドのいる部屋へ走つて向かった。

それに続き、二人も向かった。

バーン、とドアが荒々しく開き（これまた壊れた）美子が。

「美子様、、、」

「わかつたよ、あんたの！」

「早くないですか？」

「善は急げつて言うよね」

くるり、と青年の方に向き直した。

「アヴィス・メズル・リードウ」

「あ」

「うあ、、、ああつ、ぐあ、あぎいい、、」

呪文のような文章を唱え終わると青年は頭を抱え、悶えもた始めた。

「おお、効いてる！！！」

と美子は感動していた。

「があああああああああつ」

「おお、戻った！アラド、久しぶりっ！」

彼の名は、スプリット・マスター“アラド・シフィノ”。
精霊使いだ。

「さ、ループル。元に戻っていいよ」

『ありがとうございます』

と、鳥が喋り、その場が渦巻き出した。

渦が消えた所で鳥を見ると、小さな小さな人形のような女の子に変わっていた。

『皆さん、どうも！わたしは、青の妖精のループルです！』
陽気な声でそう言った。

「ループル、戻れ」

『わかりました、マスター！』

アラドがそう言うのと、ループルは消えてしまった。

「見ての通りだ。戻してくれてありがとうとな、美子さん」

「どーいたしましてえ。」

搜索11

アラドも搜索に加わり、新たに力を増した。
そんなときに、有力情報が。

「デビットが、デビットが!!」

「で、デビットがどうしたの、ねえ!」

そこで彼は、息絶えてしまった。

「彼は、デビットの何を見たのでしょうか
と、不意にアルが問う。

「何でも無いよ。彼そのものを見たんだ。彼は彼だけで気持ち悪いからね」

「・・・・・・、そんな、彼自体が気持ち悪いって、
どういう意味ですか?」

今度はマリーが。

「闇だからだよ。闇、病み、止み、気持ち悪いだろ? 直面したくない危機って言うの?」

「はあ・・・・」

曖昧な返答をするマリー。

「うふふ、良いんだよ。見れば、知れば、感じれば分かる」
君も1使いならね、と嘯く。

「美子さん」

皆が解散した後、アルが声を掛けた。

「ん? 何かな、坊や」

「ホントは、奴の居場所、知ってるんですよ」

「知ってたところで、妾が嘘つく理由は無いよ」

「じゃあ、知らないんですか」

「ウン、と言えば嘘になる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アルは黙り、美子は微笑んだ。

「あはは、矛盾って言いたいのかな？まあ、別に構わないよ。」
「はいはい、と言わんばかりに後ろを向いて手を振った。」

「美子さん！俺に、デビットの居場所を」

「諄い！」

ゴツと一発蹴りを入れる美子。

「ぐちぐち、ぶちぶち、うるっさいんだよ！おめえは、女か！？ガキ以前に女々し過ぎんだよ！！」

「びしい、と指をアルに突き立て言った。」

「み、美子さ・・・・・・・・！！？」

「どうせ、マリーを傷つけ無い為、だろ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ッ」

「つざけてんじゃないよ！何が傷つけない為！？仲間を置いて？自分だけ犠牲？アホか、お前は！」

「なっ！？」

「あんたが傷つく、一人で行く！一人にされた気持ちを考えた事、あるか？」

「一人にされた挙げ句、傷ついて帰ってきた大切な人を見たヤツの気持ちが分かるか？」

「わ、分か」

「そんなんで、分かるって言うなら、あんたは死刑だよ！お前の周りにやあずつと、毎回、“人がいた”！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「一人の気持ちもわからずに！独りの気分も味わわず！」

「絶望と失望と孤独の無い、平和な人生をそのまま続けるのか！？」

「で、でも！」

「黙れ！傷ついた事で喜ぶ奴なんて、いない！」

「お前はマリーの笑顔がみたいのか！？」

「涙がみたいのか！？」

「！」

なみ、だ……

「仲間を考えるより、自分を考えて！そうすれば、仲間も楽しい、嬉しい、笑顔なんだよ！」

それを、お前は、、、と言いながら座り込む。

「仲間の、気持ちを、知ってくれよ」

泣きながら、言う。

「みこ、さん」

「みんなが、泣くのは、嫌い、なんだよお
ぼろぼろぼろ、と。

「ふわああああん、うえええええん
最終的には号泣。

「み、美子さん！？」

そこにマリーが。

「なあ、マリー」

「え？」

「一緒に、戦ってくれるか？」

「……………、何言ってるのよ、馬鹿。当たり前じゃない。」

「ありがとう」

「水くさいわね。勝手に死んだら、私泣いて死んでやる」

搜索11（後書き）

美子さん激怒。

こつ言つセリフ考えるの小ちゃいときから大好きでした。

搜索12

『あの、あのお方の元へ行く』
アルはふと、そう呟いた。

向かった先は要予約のお酒屋さん。

カラカラ、と開けると店主ともう一人。

透き通るような綺麗な黄緑色の腰まである、ロングストレート。
瞳は炎と間違えるかのような赤。

そんな、あの人は。

こちらを向いた。

「あー、アルちゃん。おっひつさー！」

ブンブンと元気良く手を振って。

「こんにちは、零さん。」

「うん あ、店主ちゃん、このお酒持って帰る！三つ欲しいな」

「かしこまりました」

どう見ても店主の方が年上の筈。

「ありがとね」

さて、と切り返す。

「ご用は分かっちゃってるよ。お酒もらったら僕ちゃんも行くね」

どう見ても、小柄な彼女（？）には持てそうのない量。

（それ以前に彼女は成人なのか？）

それを軽々二本担ぐ。

残りの一本は元々持っていた水筒に中身を入れた。

「デビットちゃんの居場所だよな」

ぽつり、と零が呟く。

「え、な、何も言ってますんよね？」

「ん？僕ちゃんを誰だと思ってるの？」

「あ、思い出した。」

零の声を遮るように美子が言う。

「何だい、美子ちゃん？」

「あの、世界でも有名などんな仕事でも請け負う……」

「あは。知ってた？何年も前に消えたと思ったんだけどなあ」

「そう、数年前に姿を消した。」

マリーも加入。

「だけど、それは、ある事件の余興にすぎ」

「お喋りが過ぎるよ、マリーちゃん」

ギロリと睨み言う。

「は、はい……」

自分の過去を洗い浚いひたされるのは嫌いらしい。

「んぐ、んぐ。ぷつはあ、で。」

夏に水でも飲むかのような勢いで零はお酒を飲んだ。

「デビットちゃんを知りたいからには、ほーしゅーはいっぱいとるよあ」

「………分かってます」

「あはは！深刻過ぎるよ。だあーいじょーぶ。報酬は僕ちゃんもその戦いについて行く、だから」

にばあ、と微笑んだ。

「そ、そんな、危ないですよー！」

「あー、うるさい、うるさい！ついて行ってくていったら行くのお！」

飛んだ駄々っ子だ。

「まあ、僕ちゃんが行くのは、ケッテーね」
「ぶい、とブイサイン。」

「そんで、いつが良いのかな？」

今日？明日？明後日？あやうて明明後日？しめなうて明日明後日？あすあさうて」

「成るべく、早めに」

「それが一番困っちゃうよ」

うーん、と悩みこむ。

「なんでですか！？」

「だって。アルちゃん達、準備よくないじゃない？僕ちゃんの方は万端よ！」

もう見つかった、という意味だ。

「僕らは準備ができてない？」

「そぞ。みーんな、弱っちいのね！美子ちゃん除いてだ。彼女は完璧すぎる！」

いええーいと美子とハイタッチをかわす零。

「と言う訳でえ、アルちゃん達には、考えるゆーよを与えちゃうね！」

「有余？」

「うん、そーそ。今すぐに、でもいいし。仲間ちゃん達と仲良く決めちゃって」

軽く手を振りその場を去った。

搜索、始動。(前書き)

五十話ありがとうございます。

搜索、始動。

翌日、アルは即決で行く事を決め、仲間を集めた。

「ウィンド、行く気無い？」

「ごつめーん。いつくら、マリーさんのお頼みでもさあ、俺、キケンなのキライだし」

「そう、ごめんなさいね」

「それでさ、お茶とか、どーお？ いやあ、この前いい店見つけてさ
！」

「え、ああ、帰って来れたら」

あはは、と笑う。

「デビット戦？ 出させてもらうよ
と、アラド。

「申し訳ありませんが、美子様、私は棄権しますね」
美子も周りの人に当たった。

「デビット戦！？ あたしもいつていいの？」
と、コリッタ。

「うん、ありがと！ ついてくね！」

アニユエル達に問うと・・・

「俺達も本当は行かせてもらいたいんですが、仕事上、無理な様で
す」

「お誘い頂いたのに、申し訳ありません・・・」
と実に残念そうに答えてくれた。

心意気だけでも、ありがたい。

最年長のゴーズというと

「ああ、こんな老いぼれの俺でよけりゃあ、使ってくれ」
だそうだ。

そして、正体不明の少女、ゴッドは

「良いよ。面白そうだし。元々任務はそっちだったらしいからね」
と案外すんなりと受け入れてくれた。

その一同を連れ、アルは再び零のもとへ急いだ。

今回も零はあの予約専用の酒屋にいた。

「零さん」

「決めたみたいじゃん。良くそこまで人集まったね。

あ、エンちゃんが企画した人たちでパーティ組んだのか」

自問自答した。

「あらあ、見たような顔だな、とか思っちゃったら、ゴッドちゃん
じゃないの」

「零、久しぶり」

零にタメ口きけるのはゴッドと美子位ではないだろうか。
ゴッドから美子に対し、タメ口がきけるのはまたしかり。

「んー、それなら、いいかな。じゃあ、行こうか」
立ち上がった。

「あれ、零さん。お金良いんですか？」

「あー、いーよいーよ。予約料しか要らないし。 呑んでないからね」

お金の無駄である。

いまだきここまで無駄に使う金持ちはこいつぐらいだろう。
この不景気の中で、数億、数兆、と稼いでいるのはこれまたこいつだけだろう。

零について行き、たどり着いた先は教会。

「ここはね、お伽^{てい}噺^{はなし}のお姫様と王子様の様な結婚式を行つたためだけに作られた教会だよ」

「ため、だけですか。作る側も作る側ですね」
マリーははあ、と嘆息した。

「そのため、名前もそれ同様『キャッスル・チャーチ』って言うんだ。」

「そのままじゃん」

そんなゴツドのツツコミを「まあまあ」となだめる零。

「だから、内装も結構な広さなんだよ。僕ちゃんが迷うほどね」

彼女(?)の記憶力は機械並。

なのに、迷うという広さらしい。

「じゃ、入るっか」

ぎぎぎい、と重々しい扉を開け、一同は入った。

デビット戦

教会に入ると、すぐ。

女の子　ルナエラが何か水の様な物をまいていた。

「あつれえ？もうきたのお？まあいいやあ」

「アル、さつさと抜けてごめんね、でも、あたしはこいつをやる」

「OK、先行くよ。」

「分かってる。ちゃんと、追いつくから」

「あはっ？あんたさあ、懸命なのはいいけどお、あたしに殺されちゃう感じい？」

そう言う彼女に向け、マリーは得意のナイフを構えた。

ワンフロア上がると大広間に出た。

「な、なんだ、ここ？」

「ふーん。」と美子。

「おや？いつかのガキじゃんか」

どこからか、バルドが。

「ここでの相手はお前か？」

「いや？俺はただの見物人さ」

「は？」

と言って消えてしまった。

「ここでは、俺が相手だ」

と言って出てきたのはウィンド。

「な、何で、お前！？」

「やっぱり！」

アルの言葉の後に美子が。

「あんた、ジュレンね？」

「ご名答」

と。

ウィンドの周りに煙が立ち、姿が見えなくなった。

煙が消えた、と思いきや知らない男が立っていた。

「あの企画に紛れていたのはルナエラだけじゃ無かったのさ」

「こいつは、タイム・マスター時間使いだ。あんたらにや、厄介だろ？あたしが相手だよ」

「師弟対決かい？やってやらあ」

「頼みます！」

アル達は美子とジュレンを残し上へと向かった。

「おおっと、マジでこれ以上行ってもらうのは困る」

と廊下でいきなりバルドが。

「でも、僕ちゃん側では行かせなきゃいけないだ、よっ！」

と。
零の何かが伸びた。

髪だ。

「ここでは僕ちゃんが引き受けよう！デビットちゃんは最上階だよ！」

「ふん。ガキが」

「あれ、ゴーズさんは？」

と、アル。

「ああ、マリーに加勢してもらった。」

「あー、そ」

残りは二人。

「ぐ、はあ!」

その頃のマリィ。

なんで、私の技が全てかわされるの？

「あはははっ!ばっかじゃーん。事前にあたしのーりよく調べて来たと思ったのにい」

やっぱり盗賊つてのは肩書きだけで弱っちいのねえ、と嘲笑う。

「んー、気分いいから、あたし教えちゃーう!」

「が、ふ．．．．． な、何 を」

「あたしの能力う」

いえーい、とジャンプするルナエラ。

「あたしの能力はあ」

「読心能力と透視、だろ」

腕を組つつ階段から降りてきたゴーズがいう。

「ご、ゴーズさん？」

「アルから、お前さんの手助けを頼まれてな。奴はもうお前の能力を分かってたんだろ」

「．．．．．ご名答お」

ルナエラは気分悪そうに答えた。

「な、あ、がつ」

俺の時間戻しを通じない、と驚きながら倒れるジュレン。

「阿呆。それを授けた^{あたし}妾がサイキョーなのよ」

その頃の零。

フリーアクション
お遊びの時間の中にいた。

「お前、戦わないのか？」

零は全くもって、戦おうとする気力が見られなかった。

座って、お酒、、ではなく。

お茶を飲んでいた。

「んー？バルドちゃんも飲む？」

「……………要らねえよ。つーか、俺の名前教えてないだろ」

「あはは。愚問だね。僕ちゃんはなんでも知っちゃってるんだよ」
答えになってない。

「信じられねえな」

「信じなくていいよ」

「ふん。じゃ、こつちから一方的にさせてもらっぜ」

「どうぞ、ご勝手に」

バルドは零の能力や力、どれぐらい自分より上なのか調べ始めた。

調べている時、バルドが驚いた様に後ずさりした。

「！？」

「どしたん」

ダメだ、こいつ！俺より、“劣り過ぎている”！

「当たり前ちゃん 僕ちゃんはその名の通り、0^{ゼロ}」

「……………心も読めんのか」

「読めないよ。ルナエラちゃんみたいに器用じゃ無いからね」

「ふん。」

ルナエラの事も察してたのか。こいつ。

何者だ？

デビット戦2

「何者だつて、言われちゃってもね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「僕ちゃんは僕ちゃんだ。誰でもないよ。」

「じゃあ何故。そんなに知っているのか教えてもらおうか」

その頃のコリッタ。

【子供だから】という口実で置いてけぼりだ。

「なんだよ、みんな。あたしも協力するって言ったじゃん」

ずしーんずしん、と“何かに乗り”デビット城に向かっていた。

ぎい、とドアを開けると。

そこには椅子に足を組みながら座っているデビットが。

「デビット！ やつと、俺は、ここまで！-！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やあ、いつかのおちびちゃん」

暗闇で見えない。

「・・・・・・・・ねえ、あれ」

「あん？」

ゴツドの問いにアルが嫌々答える。

ゴッドにはこの暗闇の中でもデビットをしっかり捉えているらしい。

「あいつ、本当にデビットなの？なんか、見た目が違うんだけど」

「どーいうことだ？」

「そう、見たことあると思えば、あれ、あんたのほんとの身体イレモじゃ
ん」

「!？」

「よく分かったな、女」

「あたしにも名前つてもんがあんの」

「そりゃ失礼、ゴッドだっただけ」

「・・・ふん」

「お、おい、それより!!」

アルはデビットに向けて手の平を向けた。

すると、その手から光が。

その光は天井へ舞い、そのまま明かりとなった。

「・・・これで、みえる」

と思ってデビットに目を戻す。

そこには。

長身の白髪な男が。

そして、金色の瞳。

上からモノを見るような目。

少し嘲笑ったような口元。

「あ、あれは、俺の!!!!」

「やっぱり!!」

デビット戦3

「ん？バレたのか」

「当たり前でしょ！それを、この子に返して！」

「つか、アルの使ってるこの身体は？何？素朴な、素直で、率直な疑問だ。」

「ああ。それはな」

とゴツドの心の質問に答える。

「俺が昔殺し」

「黙れ！！」

「え？」

アルがデビットの言葉を拒んだ。

感に障ったかの様に。

「アル？」

「あ、いや……、この身体には嫌な思い出しかないんだ」

「ふうん。ま、深くは詮索しないけど」

「おっとお、お前さんそいつの連れだろ？」

もちつと知つとけ、とデビット。

「残念だけど、こんなガキのペアなんてあたしからお断りだね。彼

氏もいるもんで」

そうか、こりやまた失礼、と戯言混じりに言う。

デビットは椅子から立ち上がった。

「さて。対戦相手は誰かな？」

「僕が行く」

「いつてらっしゃーい」

「と、止めてくれねえの？」

「キョーミ無い」

「……………」

なんとも冷たい言葉だった。

「あーはははははっ！！運命が変わる？なにそれ？結局は自身の心ココロで考えてんじゃないか！！」

ルナエラが狂ったように言う。

「グッ……ゴーズさん、せつかく、せつかく」

「いーんだよ、気にすんな」

その時。

天井がビキビキ鳴った。

バキイイイイツ！と天井が崩れる。

「ふわえ！？きゃああああつ！」

それはルナエラに直撃。

ガレキからは大量の血が。

「……ッッ」

「マリーー！」

「！この声はコリッタちゃん！？」

「助けに来たよ。大丈夫？」

「え、ええ」

相手潰されて死んだんだけど……

苦しそうな目線でガレキを見た。

「……？今そっち行くね」

リターンリバース
元に戻れ

その、大きな物体は小さな一匹のうさぎへと戻った。

「うさぎ……だったんだ……」

「！ 待て。 アルエム。 ルナが死んだ。 この戦いは延期だ」

「 待てよ！ まだ戦ってな ぐっは！？」

アルの言葉は途中で切れた。

その代わり、 アルの口から大量の血が。

「 内臓破裂だ。 お前さんなら一週間足らずで治るだろ？ じゃあな」と言っ
て闇に飲み込まれていった。

デビット戦4

彼は。

デビットは。

闇から、現れた。

「ルナ！」

と、ルナエラに駆け寄った。

優しいところあるのね

感心していたマリーに対し、

「ふん。お前が責任を負え」と。

一言言つて。

平手を、向けた。

その手からは真っ黒いものが。

「な、いやっ！」

アルが駆けつけた頃には、ゴーズが倒れ、コリッタが気絶。

そして、マリーは。

息を、失っていた。

「ま、りー？まりー？まりー！？」

泣きじゃくりたいのを我慢したような声で。

怒り狂いたいのを我慢した声で。

ぶち壊し、ばら撒きたいのを我慢した声で。

今にも世界を壊しそうなのを凝らしている声で。
すべての、ゼロの地点の声で。

そう、言った。

「マリー」

それに対し。

ぶち壊す声で。

優しく。

「死んでるね」

と。

零が。

言う。

「う、お、おおおおおおおおおお、デビットおおお、
まだ目の前にとどまっているデビットに言う。」

「あ？何かあんのか？んま、礼でも言っとくわ」

「は？」

「お前の連れのお陰で、ルナが助かった」

笑顔で。

そう、いう。

「やっぱり、お前があああああああああああああ！

！！」

「ふん。じゃあな、“ガキ”。」

「待て！まだ終わって」

「ある！やめんか！今あいつとやって勝てる状況じゃない！」

「うるせえ！！勝つんだよ！！！！！」

「アル」

静かに、零が言う。

それに殺気か何かを感じ取った様に、びくつくアル。

「美子の話を、聞け」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツツツ!!」

歯がガタガタ鳴る。

「これでいいか、美子。」

「そうね、ありがとう。アル。マリーについては戸梶財閥総力を上げて復活させてみせるから」

「こういう時に美子嬢がいると心強いな」

ゴーズがうさぎの手を借り立ち上がった。いた。

何故かコリツタは全快していた。

美子はゴーズの言葉に笑を漏らし、教会から出た。

「いい？アル」

と、零が。

「なんですか？」

「マリーの完全復活は時間が暫し掛かるよ。だから、そうだな、その期間鍛え上げてもらってはどうかかな？」

「鍛え上げてもらう？」

「うん。ゴッドちゃん、きいてるよね？」

建物の影からゴッドが。

「本部にこいつを頼んでいいかな？報酬もたんと・・・」

「いえ、お金は結構です。ですが、依頼は受けましょう」

「そっか。ありがと。じゃ、お願いね」

と言っでどこかへ去ってしまった。

治療と向上

ゴッドに案内され、ついたところは孤島。

今二人がいる場所は全くの森、ジャングルだった。

見渡す限り、木、木、木、木。

「こんなところで何を鍛えるって言うんだよ？」

たしかに俺の力には合ってるような場所だけど、と愚痴る。

「そうかつかしなさんな。」

「うるせえよ。年下には言われたくないね」

「あー、そう」

今は見た目的にアルが年下なのだが、そこは突っ込まないでおこう。

どれぐらい、歩いただろうか。

「なあ、まだなわけ？つーか、野宿とかまじないぜ？」

「うるさいなあ、あんたはどここの御曹司だ？ん？ん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・チッ」

「おっと。」

「え？」

「ここからは企業秘密だよ」

とニッコリとシニカルに笑い、アルのみぞに一発食らわせた。

「寝ててね。おちびちゃん」

そこで記憶は途切れた。

ぐったりと倒れたアルを背負い、ゴッドは進んだ。

すると、百メートルは優にあるだとうと言っぐらいの高さの崖にぶちあたった。

「ん。よし」

アルをだっこしたまま、ジャンプ感覚で跳躍。

そのジャンプ感覚の跳躍は百メートルを超え、崖を登ってしまった。

「こんにちはあ！つーか、ただいまあ！」

大きな門に向かい、叫ぶ。

その門も十メートルはあるだろう。

ゴゴゴゴ、と門が開いた。

その、城のような、基地に入り込む。

「あ、ゴッドさん。おかえりなさい。迎えたのは金髪以外全身真っ白の少女。」

「ああ、ジュライ。ただいま。」

「その方が零さんの言うアルさんですか？可愛いんですね。」
「今なら私も勝てそうですと、シニカルに微笑む。」

「レインさんたちは？」

「いつもの場所にいますよ。」

「ありがと」

ゲーム

「やあ、ゴッド。おかえり。それが例のおちびちゃんかい？」

「あ、はい。」

「ふうん。報告はもういいよ。医療室で寝かしてあげれば？」

医療室

「ちよつと、ゴッド！その子、あんたが殴ったわけじゃないわよね！？」

「え？そうだけど……」

「あばら骨がズタズタのバラバラじゃない！何本折れてるの！？死にそうじゃない」

「あ……」

数分寝かすつもりが永久の眠りにさせてしまうところだったらしい。もしかすると、クラウドは。クラウド・キーは。

そのあばらを知っていたからこそ医療室に連れて来させたのかもしれない。

「つたく。手加減を知らないさいよ」

「手加減したよ」

「どう手加減すれば、こうなるのよ！？」

まったく、と呆れたように言う。

「ん・・・・・・・・」

アルが起きるとそこは、来た時の森だった。

ゴッドに放り出されたのかと思ったが、違う。

来た頃は緑色のパーカーを着ていた。

今来ている服は白のパーカーに黄色の長袖Ｔシャツ。

それに、丈夫そうなズボン。

体を起こすと腹部に激痛を感じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ！」

そういえば、ゴッドに殴られたっけな

その時。

がささ、と草むらが。

「!？」

立ち上がり周りを見渡した。

影は、ない。

アルは手に小さな短剣を氷で作った。

それを逆手に持つ。

「よお、探すの大変だったぜ」

茂みから出てきたのは、黄色メッシュが前髪に入った黒髪の男。

ミラー・コントロール。

「誰？」

「おっと、ゴッドの上司だよ。それしまえ。」

「??？」

「今から“始まる”ゲームに関する人間だ。安心しな。敵じゃねえ」
アルは仕方なく短剣をおさめた。

しばらくすると、忍者のように、全身真っ黒なエイプリルが現れた。
「はじめまして。それでは、説明を始めましょう」

口元が微笑む。

フードのせいで、顔が見えない。

「あー、それと。私の顔は見ないでくださいね。」
「
どという忠告だか、アルにはわからなかった。」

説明も終わり、

ゲームが始まる。

「はい、これ。マップです」

アルは受け取り、ミラーは拒否した。

ゲーム（後書き）

なんか、変な悪い癖がついたみたいです。
具体的には言いませんけど

ゲーム2

「この地図で言うB地点は、ここ。私たちが今いる場所です。」
と、エイプリルが言う。

「そして、A^{ゴール}へと行ってください。どんな手段でもかまいません」

「OK」

「あー、それと。」

付け足した。

「ここは、夢の世界でないのでご注意ください」

アルは今まで夢の中だと思っていた。

だって、ゴッドもないし……。

「ねえ、ゴッドは？」

「あん？今頃休んでるだろうよ」

「え？」

「なんだよ？俺みてえな男じゃわる」

ミラーが言い終える前に、目の前に二人、人が現れた。

「こんにちはあ。隆^{りゅう}とお」

「陵^{りょう}だ」

黒メッシュの白髪超ロングをツインテールにまとめている。

そして、陵は白メッシュに黒髪。

目つきが悪かった。

「俺らと戦って負けてもらおうか」

「僕らは勝つ条件でここにいるんだからねえ」

二人は意気揚々という。

二人は分裂した。

ミラーと陵が戦って、

アルと隆が戦う。

「子供相手だからって僕は手加減しないよお」

「僕っ子キャラがよく被る作品だな。これが終わったら作者に抗議しよう」

うふふ、とシニカルに笑う隆。

「うふふふ。見てえ？上手でしょー？」

隆は木の葉を操って見せた。

「そっちが、自然を使うなら、僕もそーするよお」

隆の周りには木の葉が舞っている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・、ふざけてるねえ」

その時。

バキバキバキ、と戦っているはずのミラーたちのほうから陵が飛んできた。

気絶している。

「陵！？」

「あ、わりい。死んでたらごめんな。どうも、ガキはうざくってよお」

これには、アルも驚く。

「な、何してるんですか！？」

「ん？戦えって言われちゃ倒すしかねえだろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お？お前さん棄権か？度胸ねえなあ」
カッチーン、と。

「ああ！やればいいんでしょう！」

「それにしても、強いんですね」

「そうか？改人じゃあ普通なほうだぜ？人間さんよ」

「ぼ、僕だって能力ぐらい持ってます！」

「いい能力をな。」

「え？」

「あん？ゴツドから聞いてねえのか？……………」
「うわけねえよな」

「ゴツドは昔、殺し屋だったんだよ」

「え？」

「改人連盟にいる改人たちはいい生い立ちを持ってねえんだよ」
「生まれてきただけ幸福か、と呟く。」

「こ、殺し屋について詳しく教えてください」

「やるねえ」

ゲーム3

「殺し屋のゴッドについて詳しくお願いします！」

「フツ、やるねえ」

ガキのくせになあ、と呟く。

ゴッドは昔、最強と謳われる殺し屋の跡継ぎだったんだ。

そして、ある日。

彼の祖父が死んだ。

殺し屋を作った本人が。

そして彼女に、こう、言った。

『ゴッド、お前は、優しくていい子だ。そのまま、その心を、持ち、つづけろよ』

『おじいちゃん？おじ、いちゃ』

『ゴッド、聞いたか？』

『いや、いや！死なないで』

ゴッドは思ったらしい。

私は殺し屋なのに優しい心なんているの？

その日の夜、悩んだ挙句。

改人の力に目覚めた。

そして、一族ごと滅ぼし、目の前にあったのは焼け野原。

『う、あああああああああああ！？』

「そこで、クラウドに拾われたんだと。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どした」

「焼け野原？」

「あ？ああ」

「どんな力を使えば？改人って、体術に優れた人たちじゃないの？」

「舐めてんなあ」

「はあ、と嘆息した。」

これには飽き飽きだぜ、と続けて。

「俺らはな、お前ら“く使い”をひつくるめた存在と思つときゃいーんだよ」

「え！？」

じゃあめっちゃめっちゃ強いの！？と今更ながら言う。

それに呆れたミラーはポケットから板チョコを取り出し口に含んだ。

「もう、お前と話していると無駄に体力消費するわなあ」

「すいません」

「ところでよお、ここ今どこだ？」

「えと、あれ！？スタート地点・・・・・・・・」

そこで、ミラーは「あ」と言った。

「ごめん、言うの忘れてた。改人本部にある森は、四六時中二十四時間三百六十五日ずっと動いてるんだ」

「は？」

「だから、その名も『インファイニティ・ラビリンス永遠に抜け出せぬ迷路』っーんだよ」

「ええええ！？じゃあ、ゴールできな」

がし、とミラーはアルをつかんだ。

「ちょ！？」

「飛ぶぞ」

背中には黒い羽根が生えた。

次の瞬間バササ、と空に飛び出た。

「ゴールどこだったかなあ」

空中にいるまま探す。

アルはほんの数秒もない間の出来事だったので足をじたばたさせ、驚いている。

「おい、落ちるぞ」

の一言で、その足は止まった。

「てめえも探せ」

と言つて空中に投げ出した。

「うぎゃあああああ!？」

「風使え、風」

浮いている。

否、浮かされている。

ミラーによって。

「キッツイから早くその、ナチュラルなんたらで浮け」

「あ、はい!」

ナチュラル・マスター

「ちえ、つまないなあ。合格です、オメデト」

機嫌を損ねている、エイプリルが言う。

「次の試験も設けてあるのでそれまでごじゅーに」
と言って消えた。

「この数ヶ月、本当にありがとうございました」

門を前にぺこりと、深々とおじぎするアル。

「なあに、ただ零ちゃんにお願いされたからやっただけだよ」

僕は実質何も手を貸してないしね、と微笑むクラウド。

「それでも。俺は感謝いっぱいなんです」

「・・・・・・さあ、門が開く」

「は、はい！」

「アル。おかえり」

全快したマリーが、門の外で待っていた。

「行きましょう。倒しに。そして」

「救いに」

アルは改人本部を後にした。

「あいつだ！誰か！あいつを追ってくれえ！」

「アル、わかつてるわよね！？」

「！？」

いきなりの声に、男は驚いた。

「ああ、壊さなきゃいいんだろ！」

と言いながら男の頭の上をジャンプで乗り越えた。

それは、“長身の白髪の男だった”。

「万引きに食い逃げね。」

「酷いやからね」

「ああ、で、次は？」

「次は……、国が変わるわね」

「ふうん。まあいいけどよ」

ファーストフード店でハンバーガーをほう張りながら会話するアル
エム。

ところでよ、と切り返す。

「せっかく戻れたんだ、美子さんたちに挨拶しにいこうぜ」

「そうね、息抜き混じりに」

そう言つて二人は席を立った。

白いふんわりとした、雲のような髪。

雷のように、黄色く輝く瞳。

そして、長身。

それが、ナチュラル・マスター奴の特徴だ。

ナチュラル・マスター（後書き）

ピッタリ六十話無理でした。
五十九話完結です。

一度でも読んでいただきありがとうございました。
気分によっては続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2347p/>

自然使い ナチュラル・マスター

2011年7月3日13時19分発行